

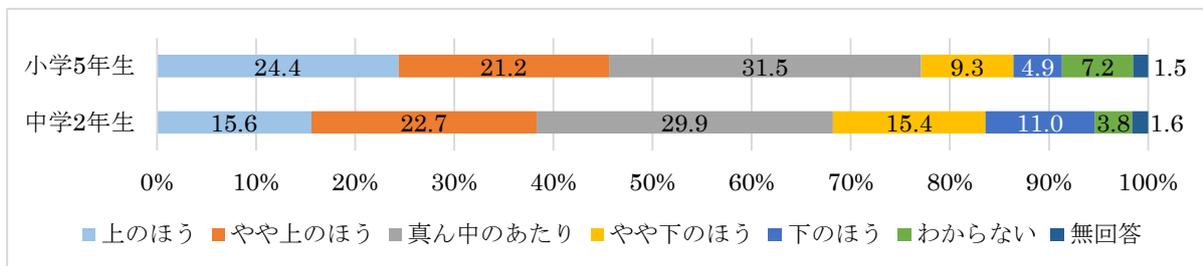
第5章 子どもの学び

1. 子どもの学力

(1) 主観的成績

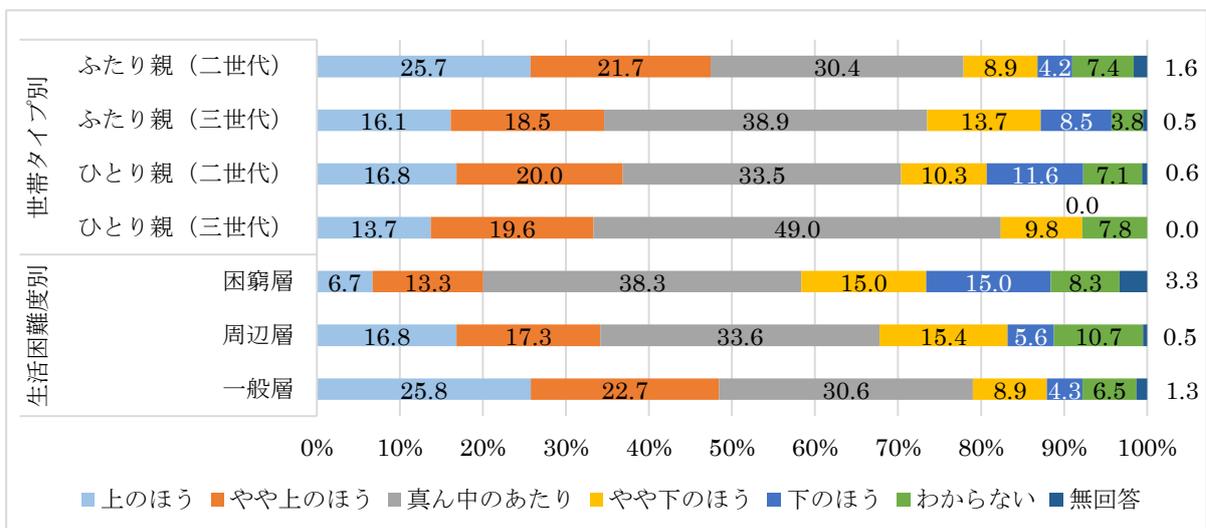
子どもに自分の成績について「クラスの中でどのくらいだと思いますか」と聞いたところ、小学5年生の24.4%が「上のほう」、21.2%が「やや上のほう」と答えている一方で、9.3%が「やや下のほう」、4.9%が「下のほう」と回答している。中学2年生になると、小学5年生に比べて、全体的に自分の成績の評価が下がる傾向がある。中学2年生の15.6%が「上のほう」、22.7%が「やや上のほう」と答えている一方、15.4%が「やや下のほう」、11.0%が「下のほう」と回答している。中学2年生の「下のほう」の割合は小学5年生の2倍以上である。

図表 5-1-1 主観的成績



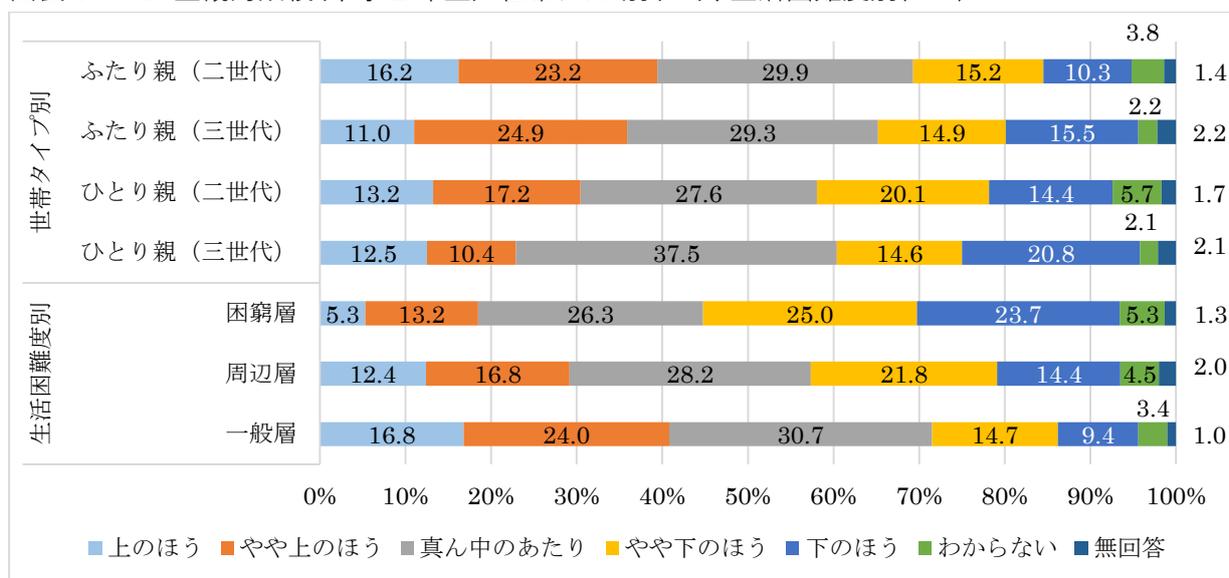
小学5年生の主観的成績については、世帯タイプ別、生活困難度別いずれも統計的に有意な差が見られる。世帯タイプ別に見ると、自分の成績が上の方だと感じる子どもは、ひとり親（三世帯）世帯にて最も低く、13.7%、最も高いふたり親（二世帯）世帯の25.7%と比較するとその差は12ポイントである。生活困難度別で見ると、生活困難度が上がるほど「下のほう」と回答する割合が高くなる傾向にあり、困窮層の15.0%の子どもが自分の成績を「下のほう」と感じている。

図表 5-1-2 主観的成績(小学5年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



中学2年生においても、世帯タイプ別、生活困難度別の共に統計的に有意な差が見られ、世帯タイプ別においては、ひとり親(三世帯)世帯で「下のほう」と回答する割合が最も高く20.8%となっている。生活困難度別に見ると、中学2年生においては生活困難度が上がるにつれ自分の成績が下の方だと感じる子どもの割合が増え、困窮層の48.7%が自分の成績を「やや下のほう」「下のほう」と感じている。

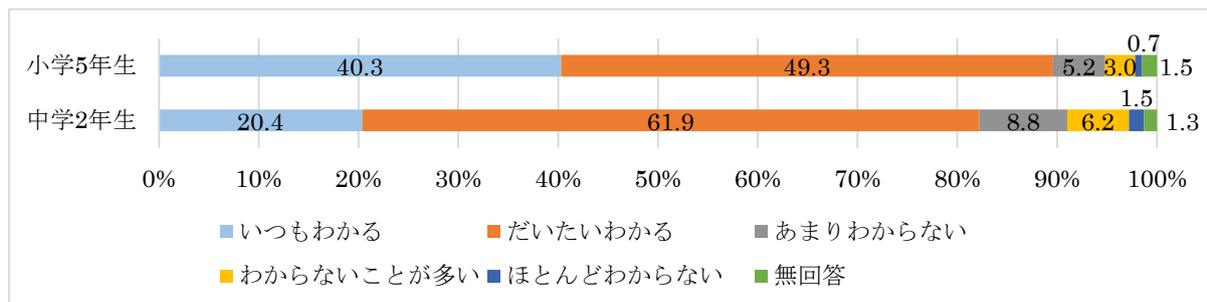
図表 5-1-3 主観的成績(中学2年生):世帯タイプ別(**)、生活困難度別(***)



(2) 授業の理解度

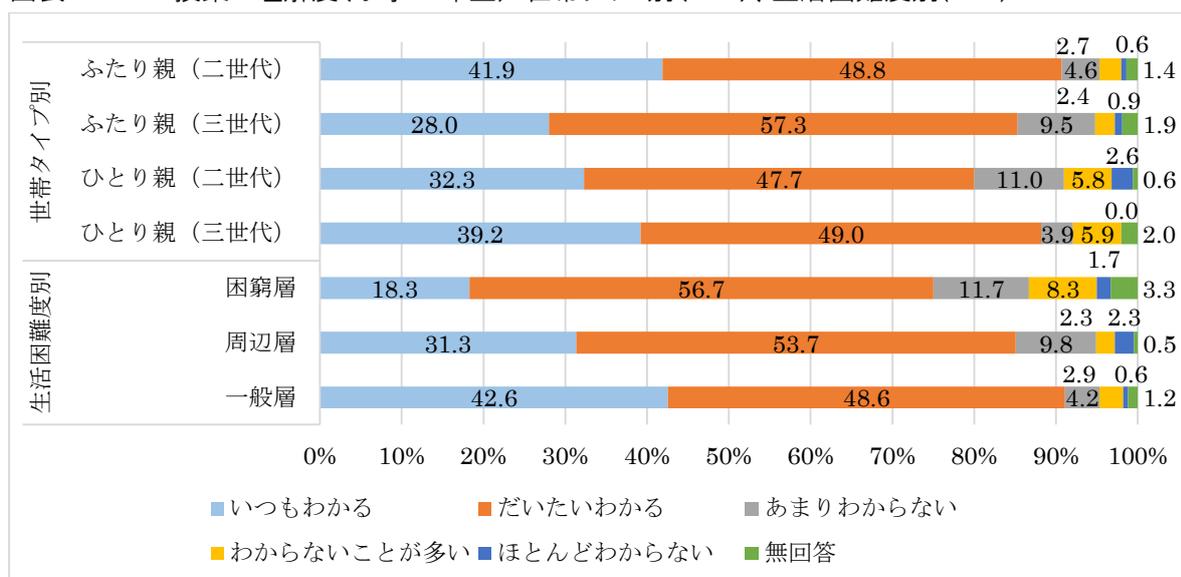
子ども本人に、「学校の授業がわからないことがありますか」と聞いたところ、小学5年生の40.3%が「いつもわかる」、49.3%が「だいたいわかる」と答えており、合わせて89.6%が学校の授業が理解できると回答している。一方で、5.2%が「あまりわからない」、3.0%が「わからないことが多い」、0.7%が「ほとんどわからない」と回答しており、小学校の段階においても学習に課題を抱える子どもが1割近く存在する。また中学2年生においては、合わせて82.3%が「いつもわかる」「だいたいわかる」と回答する一方で、8.8%が「あまりわからない」、6.2%が「わからないことが多い」、1.5%が「ほとんどわからない」と回答しており、授業がわからない子どもの割合は小学5年生よりも高くなっている。

図表 5-1-4 授業の理解度



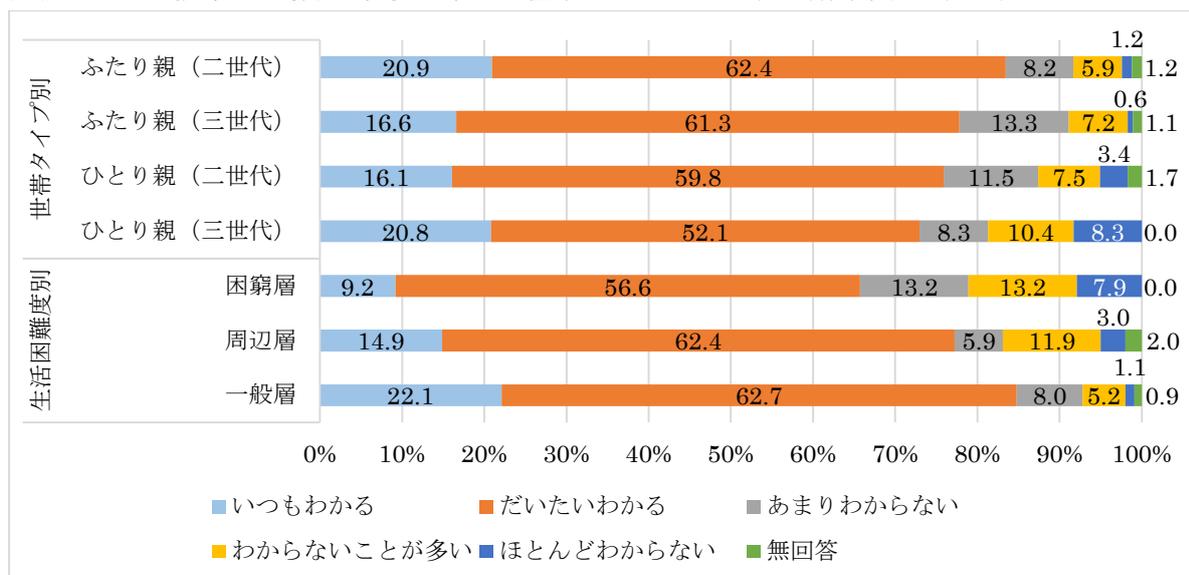
この割合を、世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、小学5年生では、どちらも統計的に有意な差が見られる。世帯タイプ別においては、「わからないことが多い」と回答する割合は、ひとり親（二世帯、三世帯）世帯で高く、5.8%、5.9%である。また「いつもわかる」と回答する割合が最も低いのはふたり親（三世帯）世帯で28.0%であった。生活困難度別では、困窮層にて「いつもわかる」と回答した子どもは18.3%となっており、これは、一般層の42.6%に比べ24.3ポイント低い。困窮層の約2割は、学校の授業がよくわからない（「あまりわからない」11.7%、「わからないことが多い」8.3%、「ほとんどわからない」1.7%）と答えている。

図表 5-1-5 授業の理解度(小学5年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



中学2年生においても、世帯タイプ別、生活困難度別ともに統計的に有意な差が見られる。世帯タイプ別においては、「ほとんどわからない」と回答する割合がひとり親（三世帯）世帯で8.3%となっており、この割合が最も低いふたり親（三世帯）世帯の0.6%と比較するとその差は7.7ポイントである。生活困難度別においては、困窮層では「いつもわかる」と回答した子どもは9.2%であり、一般層の22.1%と比べると、その差は12.9ポイントとなっている。困窮層の3割以上は、学校の授業がよくわからない（「あまりわからない」13.2%、「わからないことが多い」13.2%、「ほとんどわからない」7.9%）と回答している。

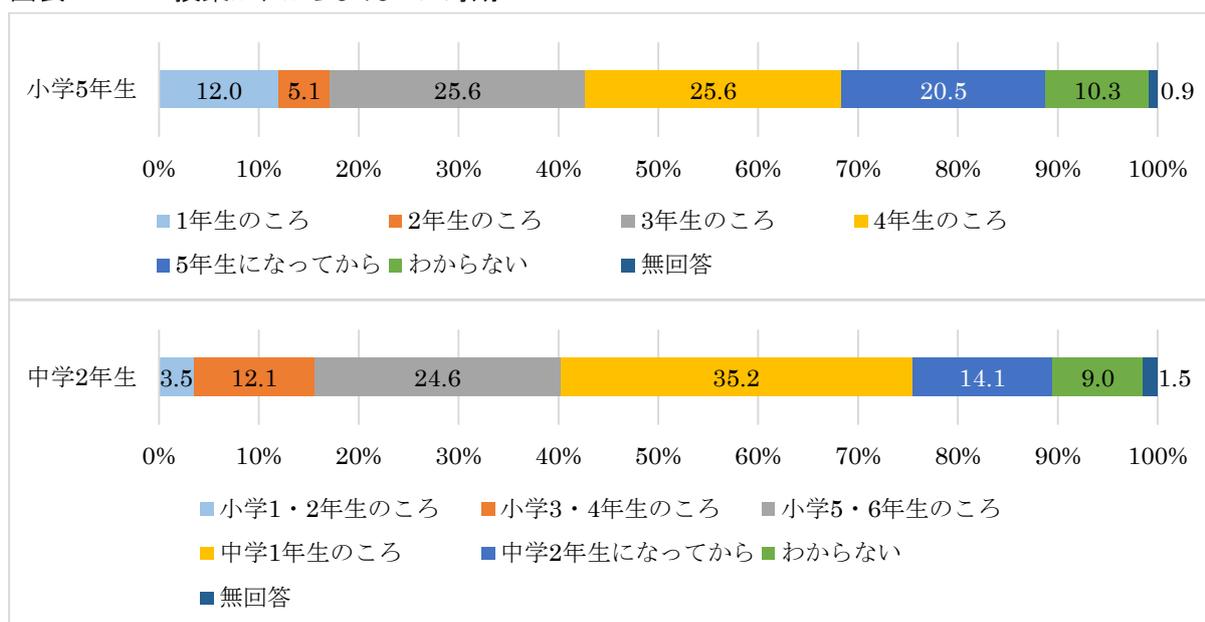
図表 5-1-6 授業の理解度(中学2年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



(3) 授業がわからなくなった時期

次に、授業が「わからないことが多い」または「ほとんどわからない」と答えた子どもに、いつからわからなくなったのか聞いた。すると、小学5年生においては、「3年生のころ」と「4年生のころ」が最も多く共に25.6%、次が「5年生になってから」の20.5%であった。一方、「1年生のころ」12.0%、「2年生のころ」5.1%と答えた子どももあった。中学2年生では、最も多いのは「中学1年生のころ」であり35.2%、次に多いのが「小学5・6年生のころ」の24.6%であった。一方で、「小学3・4年生のころ」「小学1・2年生のころ」と回答した子どもも、それぞれ12.1%、3.5%存在する。なお、小学5年生においてのみ世帯タイプ別の有意な差が確認されたが、一貫した傾向は確認されなかったため図表は省略する。また、両学年とも生活困難度による違いはない。

図表 5-1-7 授業がわからなくなった時期



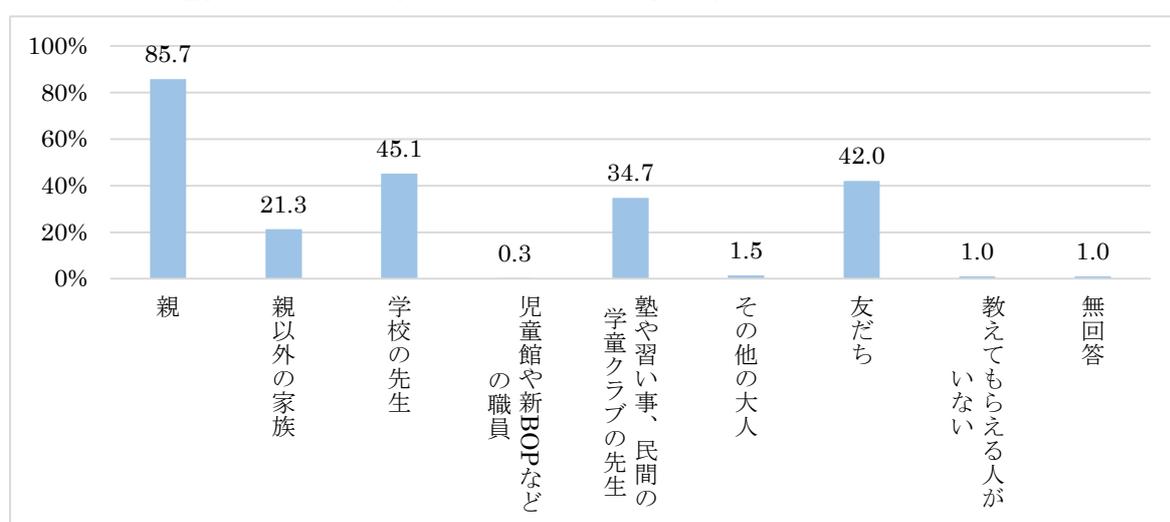
2. 子どもの学習状況

(1) 勉強を教えてください人

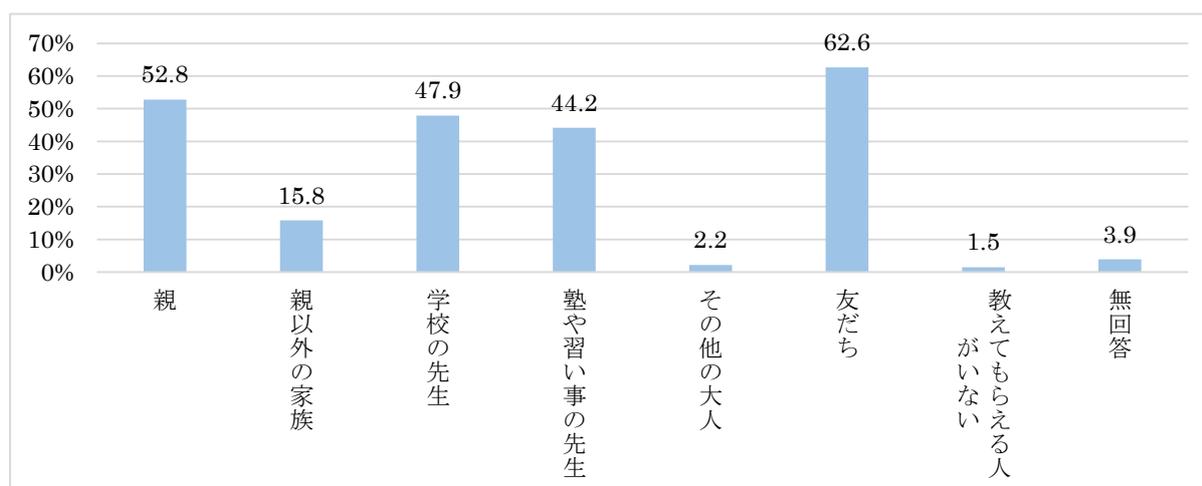
次に、子ども本人に、「勉強がわからないときは、誰に教えてもらいますか」と聞いた。回答は、「親」「学校の先生」などの選択項目について、複数回答にて回答を得ている。その結果、小学5年生の回答で最も多かったのは「親」であり、85.7%、次に多かったのは「学校の先生」であり45.1%であった。「友だち」と回答した子どもは42.0%、「塾や習い事、民間の学童クラブの先生」と回答した子どもは34.7%、「親以外の家族」と回答したのは21.3%であった。

中学2年生では、最も割合が高いのは「友だち」であり62.6%、次が「親」で52.8%であり、「学校の先生」が47.9%、「塾や習い事の先生」が44.2%となっている。

図表 5-2-1 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学5年生)



図表 5-2-2 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学2年生)

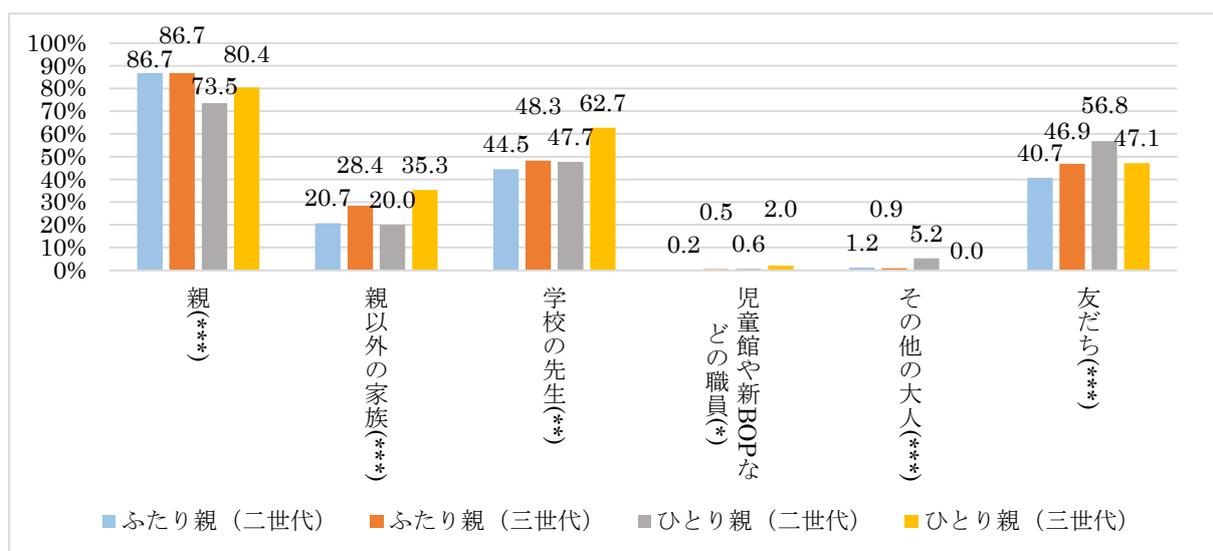


勉強がわからない時に教えてもらう人について、世帯タイプ別に見ると、小学5年生においては、「親」「親以外の家族」「学校の先生」「児童館や新BOPなどの職員」「その他の大人」「友だち」

について、統計的に有意な差が見られ、「塾や習い事などの先生」「教えてもらえる人がいない」については統計的に有意な差が見られなかった。

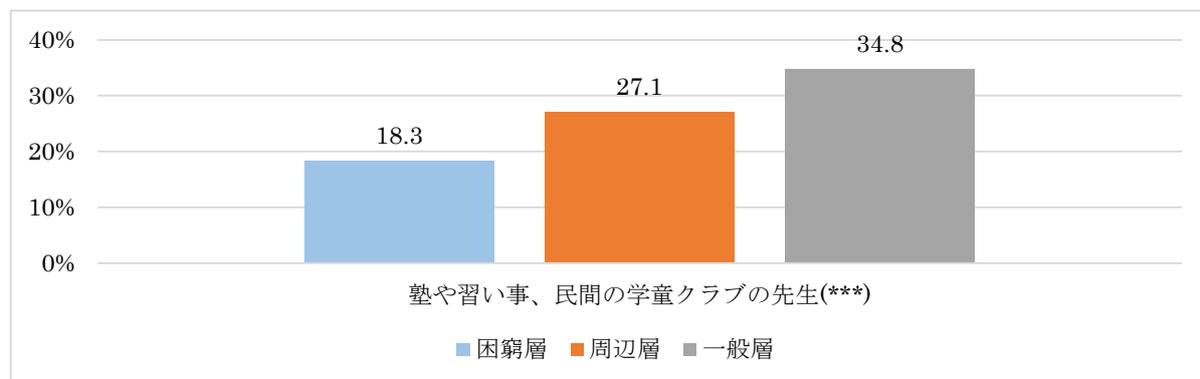
「親」に聞く割合が最も低いのは、ひとり親（二世帯）世帯の子どもで 73.5%、ふたり親世帯の子どもは二世帯世帯、三世帯世帯いずれも 86.7%とひとり親と比較して高い。「学校の先生」に聞く割合が最も高いのは、ひとり親（三世帯）世帯の子どもで 62.7%と、最も低いふたり親（二世帯）世帯の子どもと比較して 18.2 ポイント高い。また「友だち」に教えてもらう割合がもっとも高いのは、ひとり親（二世帯）世帯の子どもで 56.8%である。

図表 5-2-3 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学 5 年生):世帯タイプ別



これを生活困難度別に見ると、「塾や習い事、民間の学童クラブの先生」以外は統計的に有意な差が見られない。「塾や習い事、民間の学童クラブの先生」に教えてもらう割合がもっとも高いのは一般層で 34.8%、もっとも低いのは困窮層で 18.3%である。

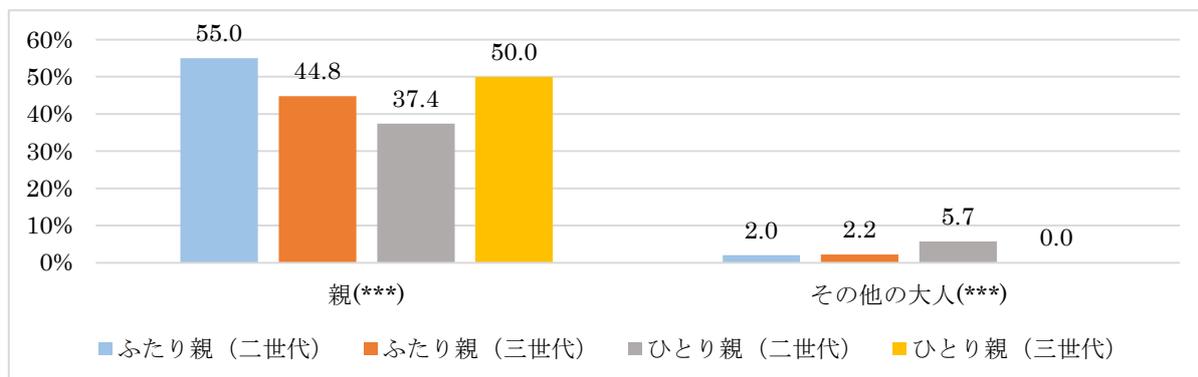
図表 5-2-4 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学 5 年生):生活困難度別



中学 2 年生については、世帯タイプ別に見ると、「親」「その他の大人」で統計的に有意な差が見られ、「親」に教えてもらう割合がもっとも高いのはふたり親（二世帯）世帯の子どもで 55.0%、

もっとも低いのはひとり親（二世帯）世帯の子どもで37.4%とその差は17.6ポイントである。

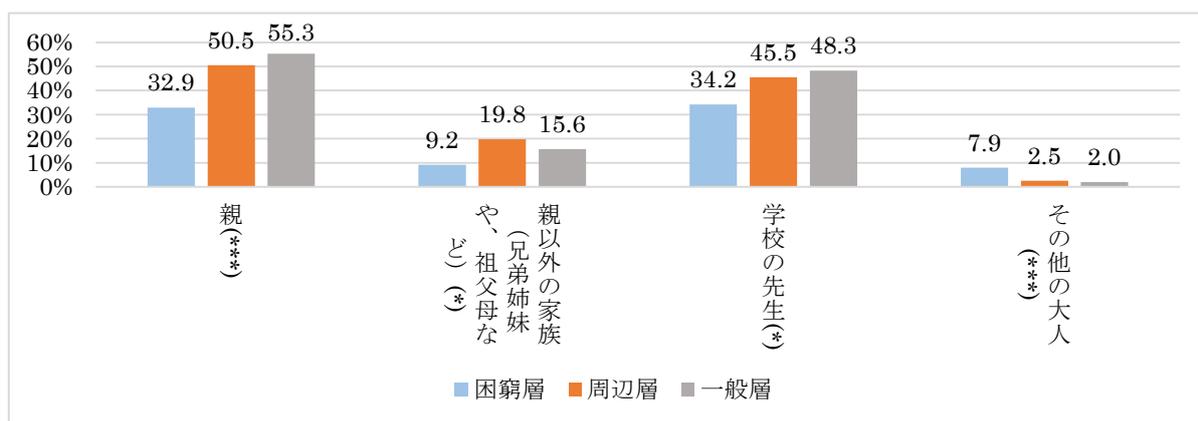
図表 5-2-5 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学 2 年生):世帯タイプ別



一方、中学 2 年生の生活困難度別に見ると、「親」「親以外の家族（兄弟姉妹や、祖父母など）」「学校の先生」「その他の大人」にて統計的に有意な差が見られる一方で、「塾や習い事などの先生」「友だち」「教えてもらえる人がいない」については、統計的に有意な差が見られなかった。

「親」に教えてもらっている子どもの割合がもっとも高いのは、一般層で 55.3%、もっとも低い困窮層の 32.9%と比較するとその差は 22.4 ポイントである。また、「学校の先生」に教わる子どもの割合がもっとも高いのも一般層で 48.3%、もっとも低いのは困窮層で 34.2%である。一方で「親以外の家族（兄弟姉妹や、祖父母など）」に教わる子どもの割合がもっとも高いのは、周辺層で 19.8%、一般層で 15.6%であるが、困窮層では 9.2%であった。唯一、困窮層が高かったのは「その他の大人」であった。

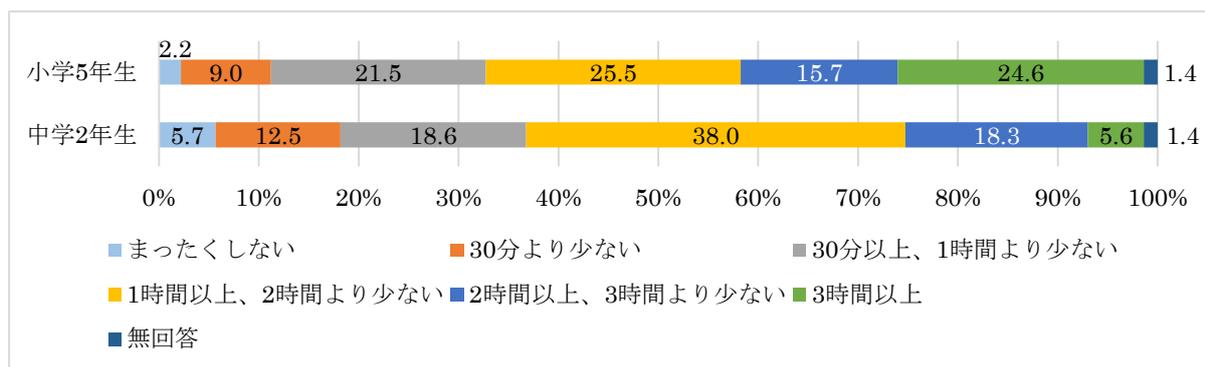
図表 5-2-6 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学 2 年生):生活困難度別



(2) 授業以外の勉強時間

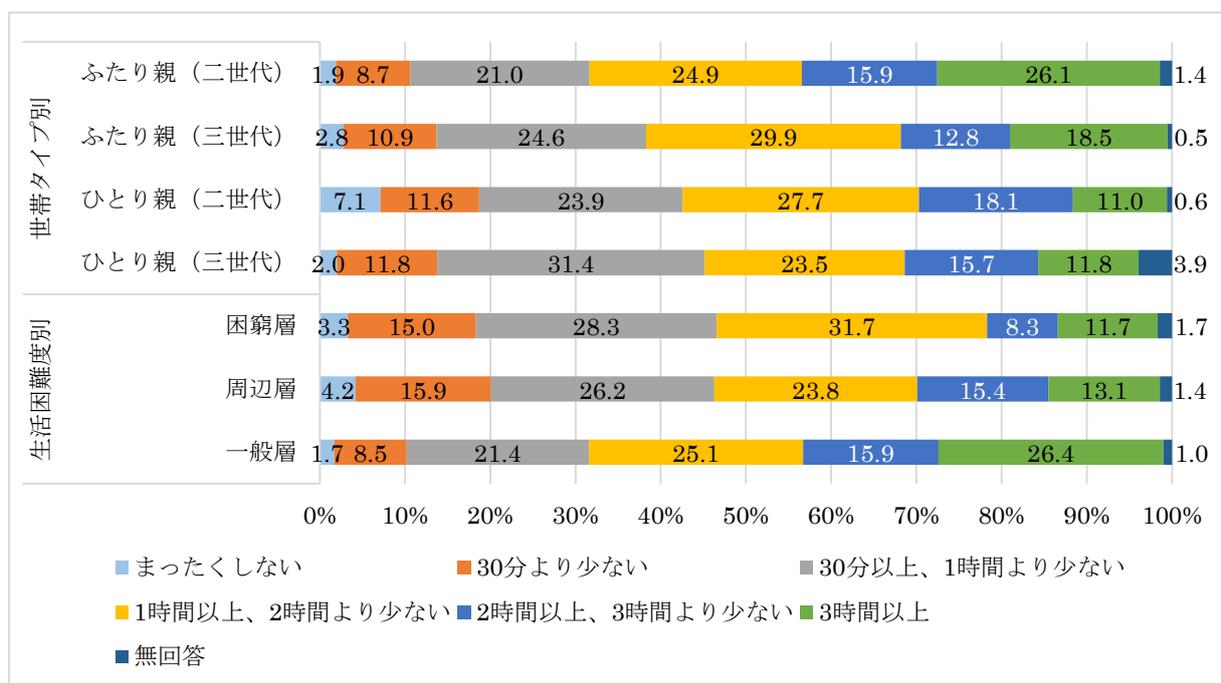
次に、学校の授業（月曜～金曜）以外の勉強時間について聞いた。すると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも「1 時間以上、2 時間より少ない」と回答した割合が最も高く、小学 5 年生で 25.5%、中学 2 年生で 38.0%であった。また「まったくしない」と回答した子どもは、小学 5 年生で 2.2%、中学 2 年生で 5.7%であった。

図表 5-2-7 学校の授業(月曜～金曜)以外の勉強時間



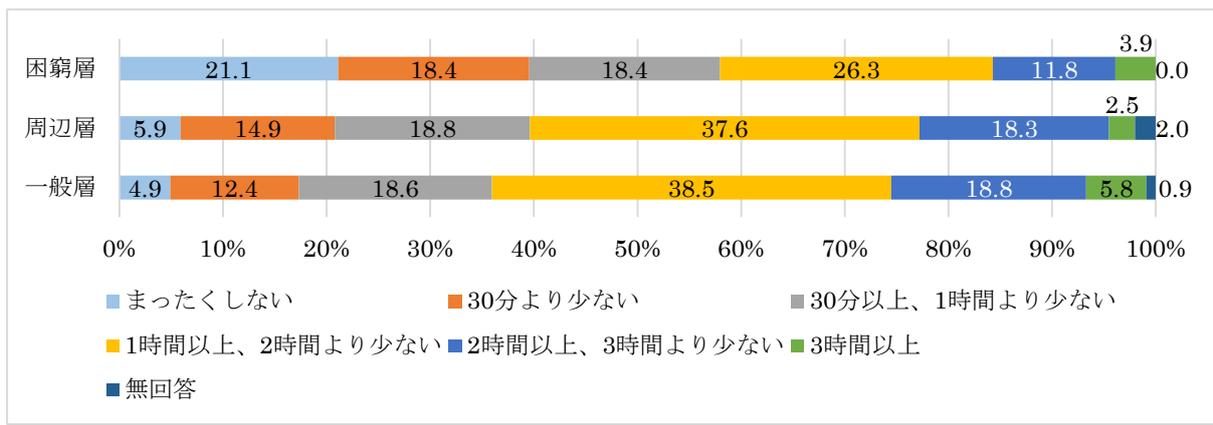
これを、世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、小学5年生では、共に統計的に有意な差が見られた。「まったくしない」と回答した割合が最も高いのはひとり親(二世帯)世帯で7.1%、一方で「3時間以上」と回答した割合が最も高かったのはふたり親(二世帯)世帯で26.1%であった。生活困難度別で見ると、「まったくしない」と回答した割合が最も高いのは周辺層の4.2%、次が困窮層の3.3%となっており、最も低い一般層では1.7%であった。また、「3時間以上」勉強する子どもの割合は、一般層では26.4%であるの対し、困窮層では11.7%であった。

図表 5-2-8 学校の授業(月曜～金曜)以外の勉強時間(小学5年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



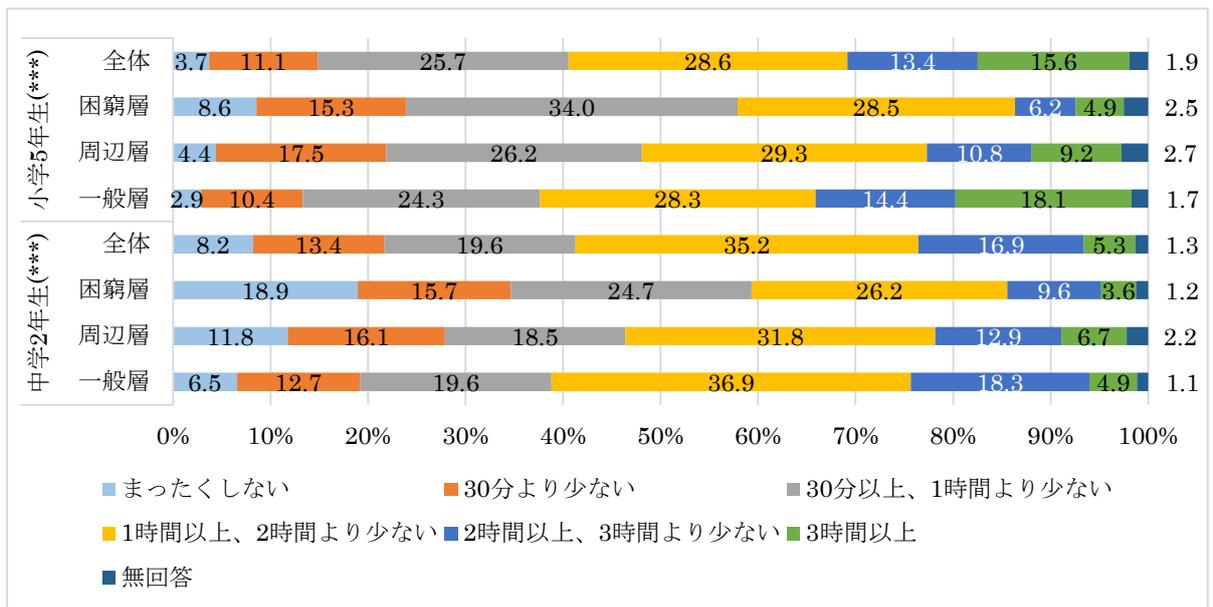
中学2年生においては、生活困難度別のみにて、統計的に有意な差が見られた。「まったくしない」と回答した割合が最も高いのは困窮層で21.1%、最も低い一般層4.9%と比較してその差は16.2ポイントである。

図表 5-2-9 学校の授業(月曜～金曜)以外の勉強時間(中学 2 年生):生活困難度別(***)



なお、参考までに東京都調査の結果を見ると、全体として小学 5 年生、中学 2 年生ともに、世田谷区よりも勉強時間が短い傾向にある。困窮層に限ると、小学 5 年生は世田谷区よりも短い傾向にあるが、中学 2 年生は世田谷区と大きな違いはない。やはり、中学 2 年生の困窮層の勉強時間が短くなることは、世田谷区の特徴と言えるだろう。

参考図表 5-A 学校の授業(月曜～金曜)以外の勉強時間(東京都調査 小学 5 年生、中学 2 年生):全体、生活困難度別

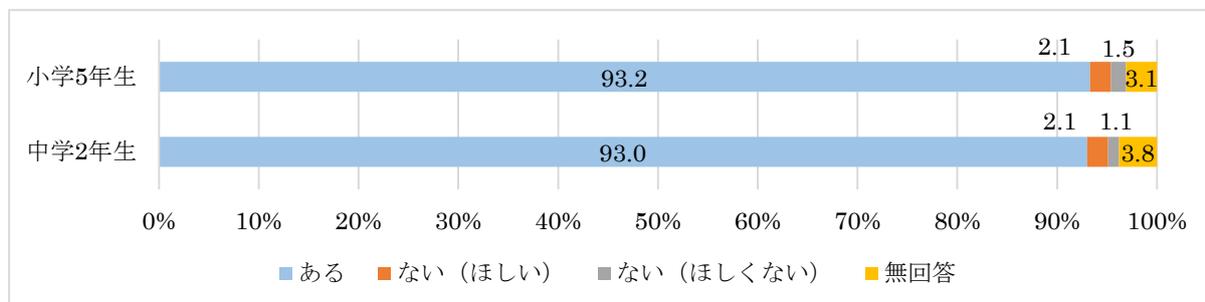


(3) 自宅の学習環境

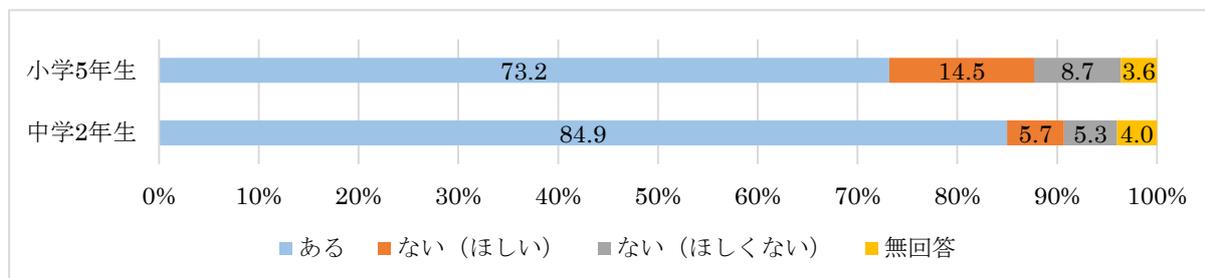
自宅の学習環境を把握するために、子ども本人に「自宅で宿題をすることができる場所」「自分専用の勉強机」があるか否かを聞いた。「自宅で宿題をすることができる場所」が「ある」と回答した割合は、小学 5 年生、中学 2 年生それぞれ 93.2%、93.0%といずれも 9 割を超える。一方で「ない(ほしい)」と回答した割合は、いずれも 2.1%、「ない(ほしくない)」と答えた子どもの割合は、それぞれを 1.5%、1.1%であった。また、「自分専用の勉強机」については、小学 5 年生

の73.2%、中学2年生の84.9%が「ある」と回答しているが、「ない(ほしい)」と回答した子どもは、小学5年生においては14.5%、中学2年生においては5.7%であった。また、「ない(ほしくない)」と答えた子どもは、それぞれ8.7%、5.3%であった。

図表 5-2-10 自宅で宿題をすることができる場所

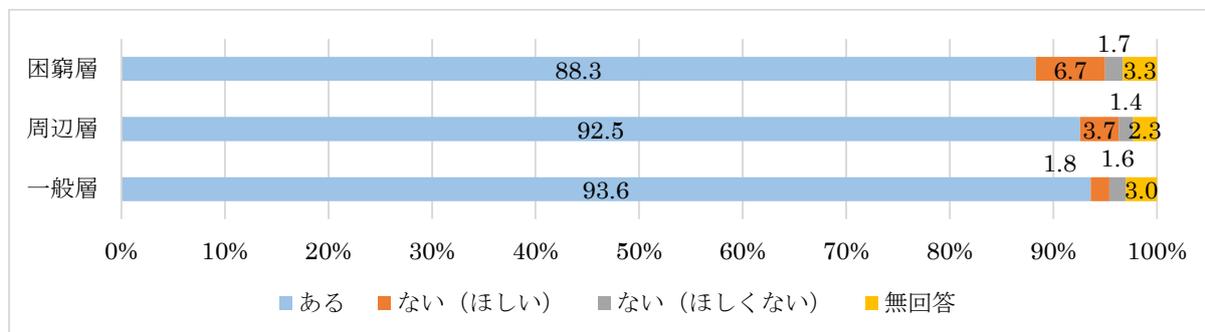


図表 5-2-11 自分専用の勉強机



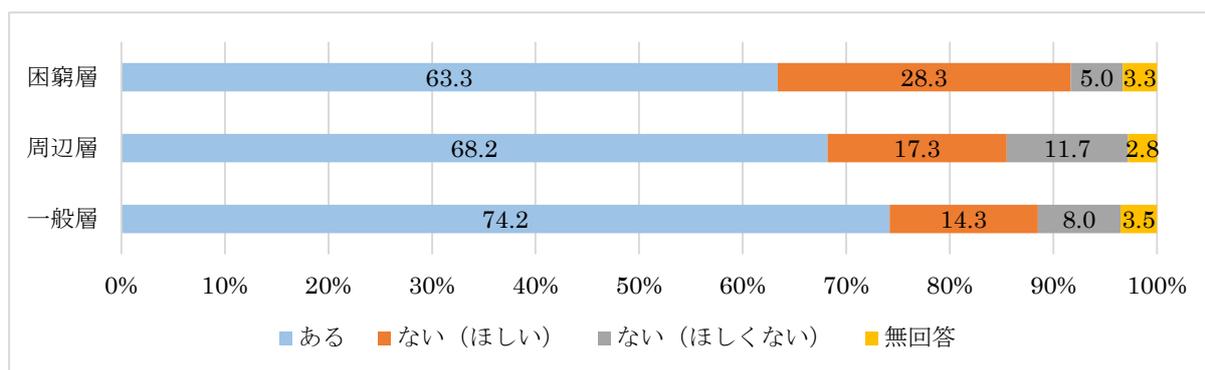
これを世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、小学5年生においては、「自宅で宿題をすることができる場所」「自分専用の机」いずれも、世帯タイプ別には統計的に有意な差が見られず、生活困難度別でのみ統計的に有意な差が見られた。「自宅で宿題をすることができる場所」については、「ある」と回答した割合は困窮層が88.3%であり、一般層の93.6%と比較してその差は5.3ポイントである。「ない(ほしい)」と回答した割合は困窮層で高く、6.7%であった。

図表 5-2-12 自宅で宿題をすることができる場所(小学5年生):生活困難度別(**)



また「自分専用の机」についても「ある」と回答した割合は困窮層にて63.3%と最も低く、「ない(ほしい)」と回答した割合もまた困窮層で高く、28.3%であった。

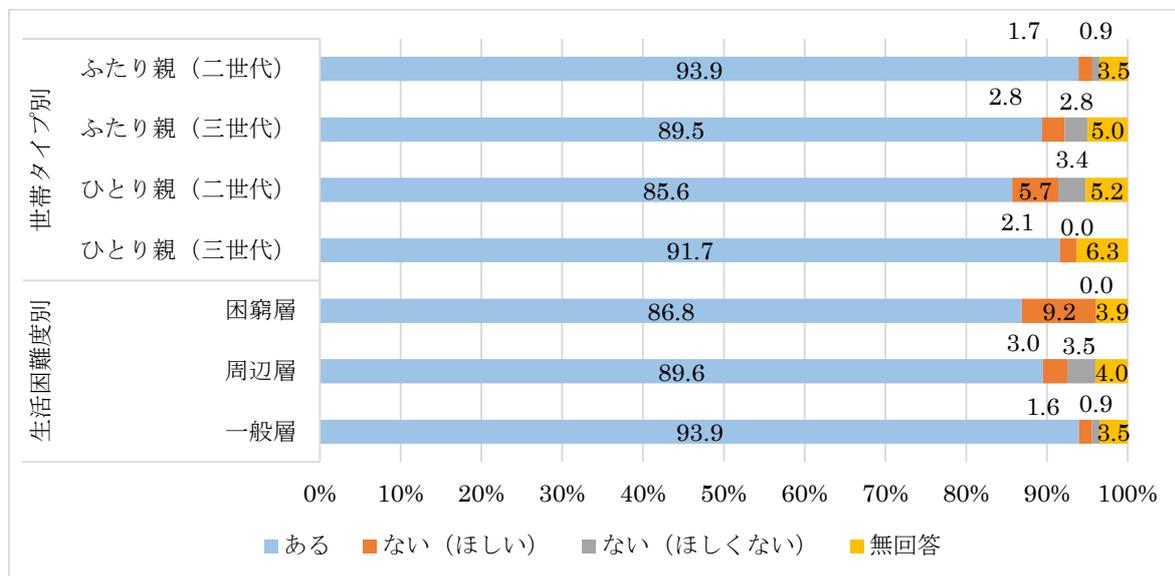
図表 5-2-13 自分専用の勉強机(小学 5 年生):生活困難度別(***)



中学 2 年生においては、「自宅で勉強することができる場所」「自分専用の机」いずれの項目も、世帯タイプ別、生活困難度別に統計的に有意な差が見られた。

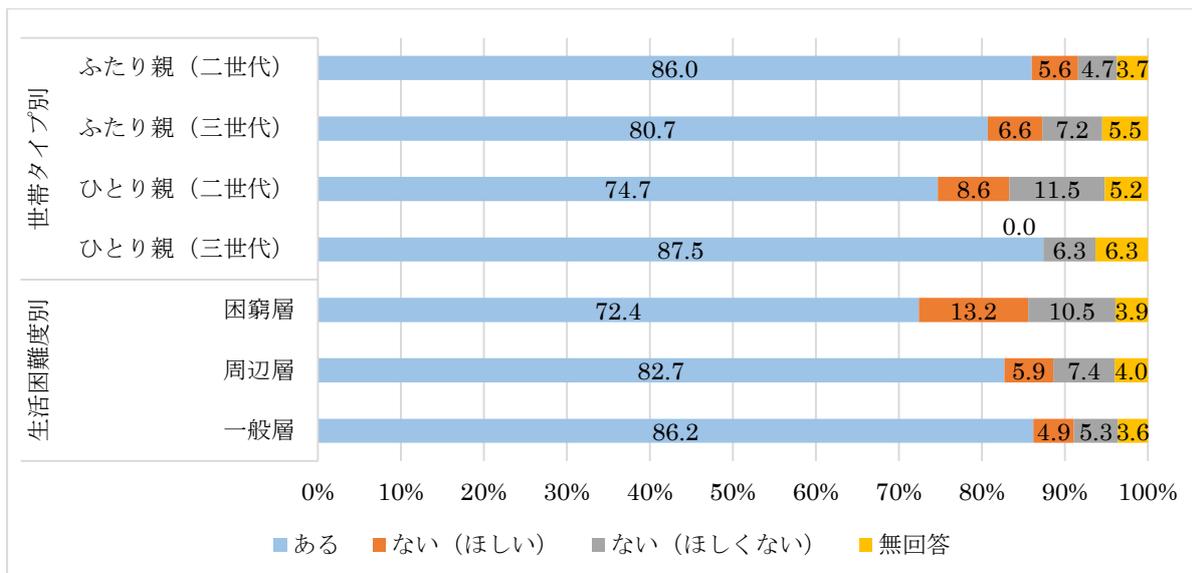
「自宅で勉強することができる場所」については、「ある」と回答した割合はひとり親 (二世帯) 世帯で最も低く 85.6%、一方「ない (ほしい)」と回答した割合は最も高く 5.7%である。生活困難度別においては、「ある」と回答した割合は困窮層が最も低く 86.8%、「ない (ほしい)」と回答した割合は最も高く 9.2%であった。一般層では、「ない (ほしい)」と回答したのは 1.6%に過ぎない。

図表 5-2-14 自宅で宿題をすることができる場所(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別 (***)



「自分専用の机」については、「ある」と回答した割合はひとり親 (二世帯) 世帯で最も低く 74.7%である。生活困難度別においては、「ある」と回答した割合は困窮層が最も低く 72.4%、「ない (ほしい)」と回答した割合は困窮層で最も高く 13.2%であった。

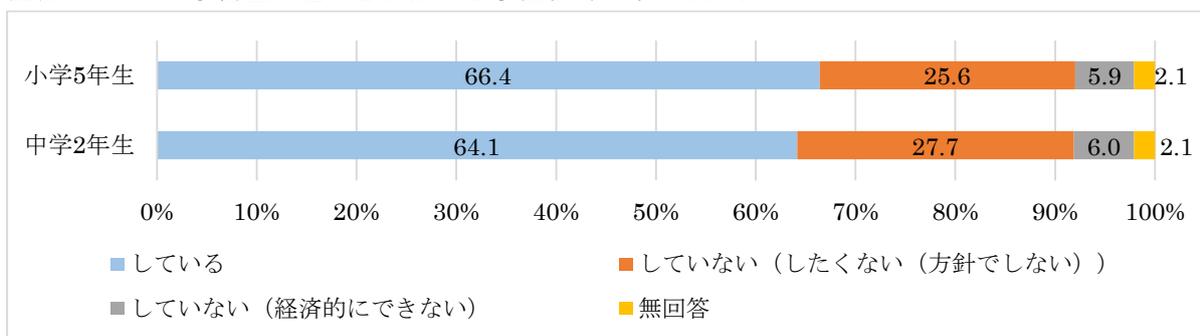
図表 5-2-15 自分専用の勉強机(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



(4) 塾や家庭教師の有無

通塾 (又は家庭教師) については、保護者票で「あなたのご家庭では、お子さんに次のことをしていますか。」の設問の内、「学習塾に通わせる(または家庭教師に来てもらう)」の項目にて集計を行う。全体においては約 6 割、小学 5 年生においては 66.4%、中学 2 年生で 64.1%が学習塾に通っている。また「していない (経済的にできない)」と回答する割合は、小学 5 年生で 5.9%、中学 2 年生で 6.0%である。なお、東京都調査における「している」の割合は、小学 5 年生 53.9%、中学 2 年生 58.0%であり、本調査の方が塾に通っている割合が高い。

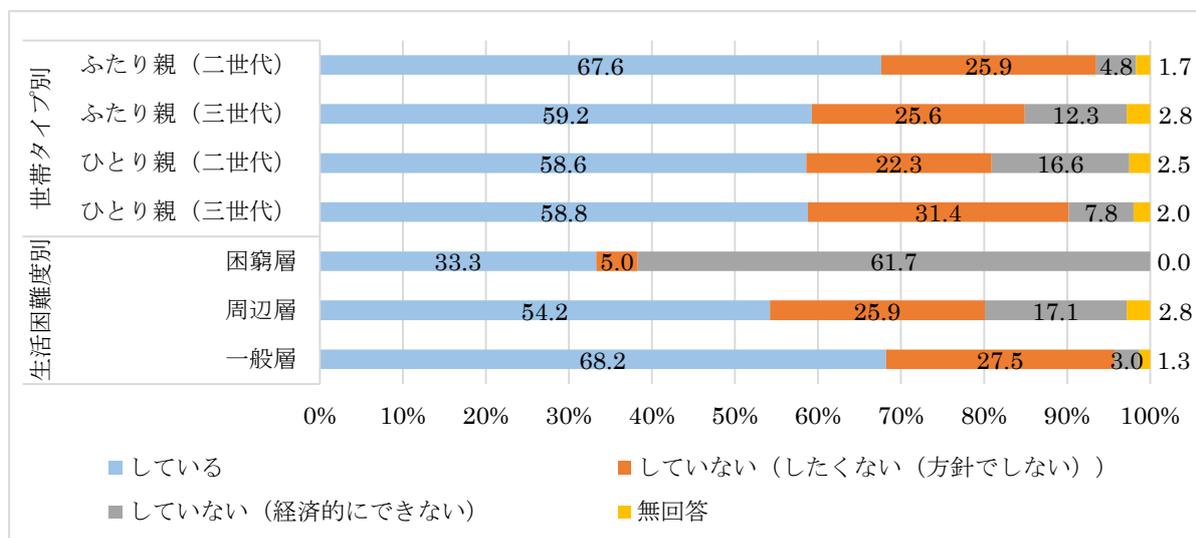
図表 5-2-16 学習塾に通わせる(または家庭教師に来てもらう)



小学 5 年生においては、世帯タイプ別、生活困難度別いずれも統計的に有意な差が見られる。世帯タイプ別で見ると「している」(通わせている)と回答する割合はひとり親 (二世帯) 世帯、ひとり親 (三世帯) 世帯いずれも低く、それぞれ 58.6%、58.8%である。また、「していない (経済的にできない)」と回答する割合はひとり親 (二世帯) 世帯で最も高く 16.6%で、もっとも低いふたり親 (二世帯) 世帯と比較すると、約 3 倍以上である。生活困難度別で見ると、「している」(通わせている) 割合は困窮層で最も低く 33.3%、一般層と比較して、2 倍以上の差がある。また「していない (経済的にできない)」と回答する割合は困窮層で最も高く 61.7%と過半数にのぼ

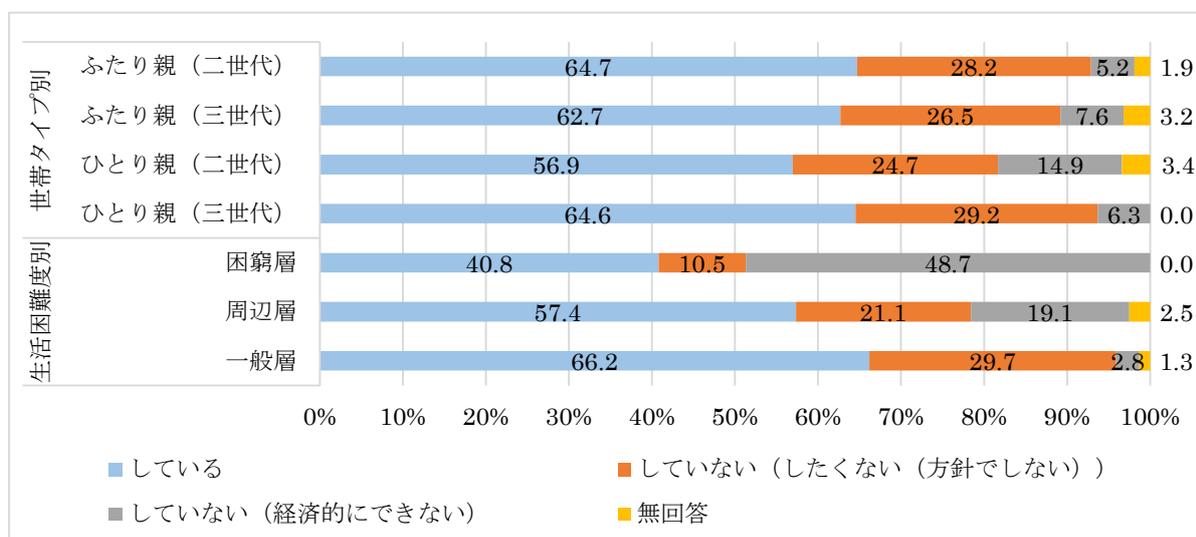
る。

図表 5-2-17 学習塾に通わせる(または家庭教師に来てもらう)(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



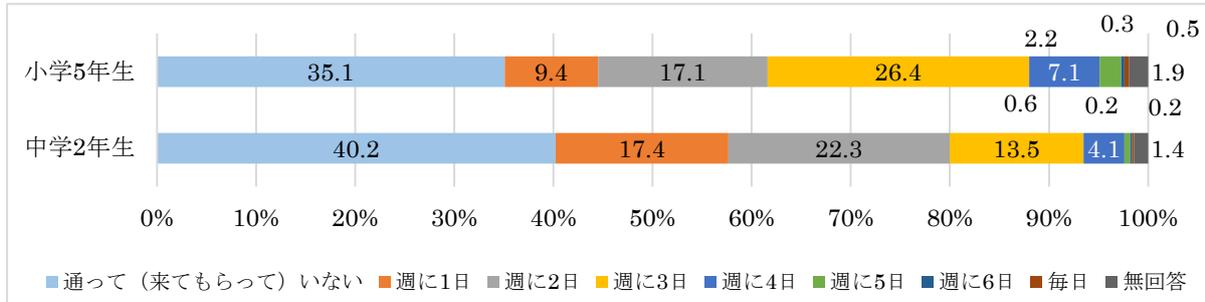
中学 2 年生においてもまた、世帯タイプ別、生活困難度別いずれも統計的に有意な差が見られる。世帯タイプ別で見ると「している」(通わせている)と回答する割合はひとり親(二世帯)世帯でもっとも低く 56.9%である。また、「していない(経済的にできない)」と回答する割合はひとり親(二世帯)世帯で最も高く 24.7%である。生活困難度別で見ると、「している」(通わせている)割合は困窮層で最も低く 40.8%、一般層と比較して 25.4 ポイントの差がある。また「していない(経済的にできない)」と回答する割合は困窮層で最も高く 48.7%と一般層の 2.8%と比較して突出している。

図表 5-2-18 学習塾に通わせる(または家庭教師に来てもらう)(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



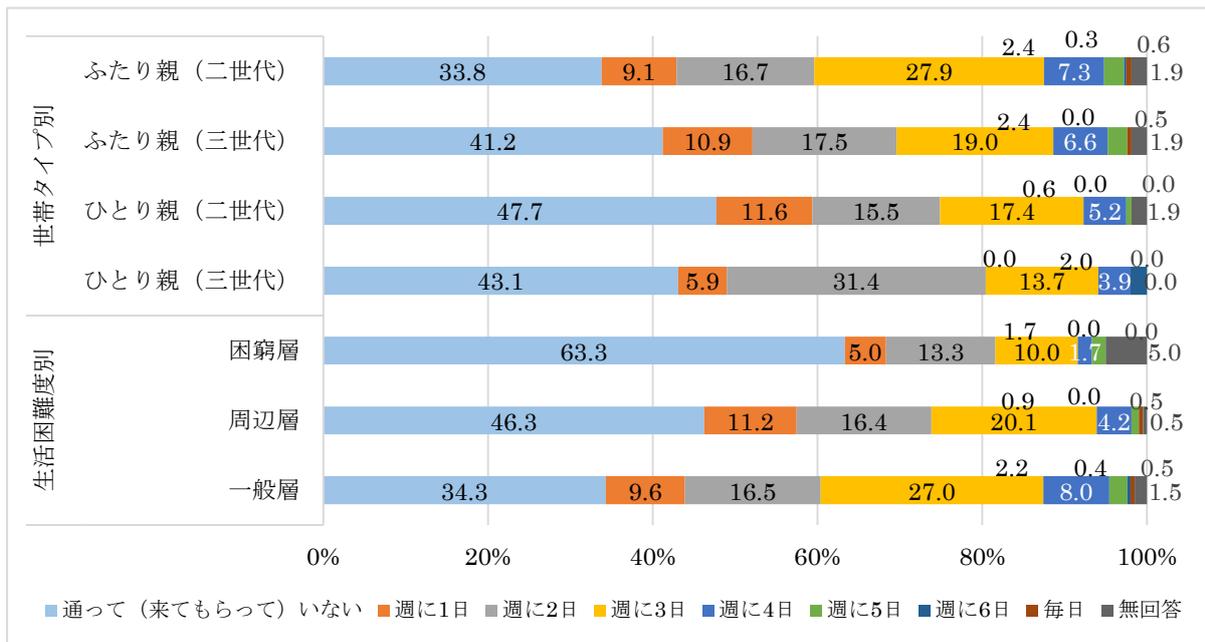
次に、子ども票の項目にある、学習塾や家庭教師の日数について把握する。小学5年生においては、「週に3日」と回答する割合が、通塾している子どもの中で最も高く26.4%である。一方の中学2年生は、「週に2日」と回答する割合が最も高く22.3%、次に「週に1日」と続く。

図表 5-2-19 学習塾や家庭教師の日数



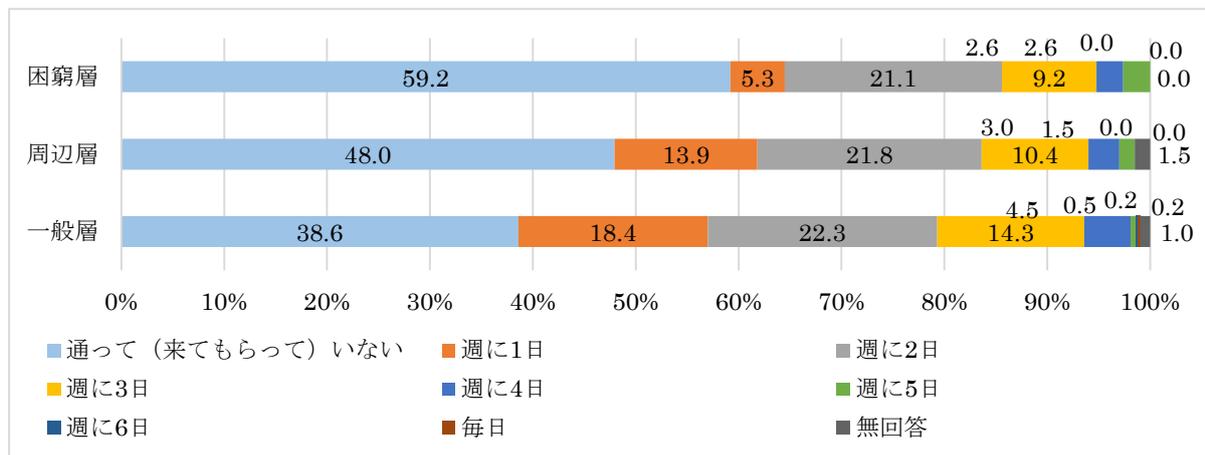
小学5年生について見ると、世帯タイプ別、生活困難度別いずれも統計的に有意な差が見られる。通塾している子どもの割合が最も高いふたり親（二世帯）世帯と、最も低いひとり親（二世帯）世帯を比較すると、塾に通っている割合が最も高い日数はいずれも「週に3日」で、それぞれ、27.9%、17.4%である。またひとり親（三世帯）世帯においては、「週に2日」と回答する割合が最も高く31.4%である。生活困難度別で見ると、「通って (来てもらって) いない」を回答した割合は一般層においては34.3%であるが、困窮層においては63.3%とその差は約2倍近い。また、通塾の日数については、一般層において「週に3日」と回答する割合が最も高く27.0%、困窮層においては、「週に2日」と回答する割合が最も高く13.3%である。

図表 5-2-20 学習塾や家庭教師の日数(小学5年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



中学2年生は、生活困難度別のみ統計的に有意な差が見られる。「通って（来てもらって）いない」を回答した割合は一般層において38.6%、困窮層においては59.2%とその差は20.6ポイントにのぼる。通塾日数においては、通塾している子どもの割合が最も高い一般層、最も低い困窮層いずれも「週に2日」と回答する割合が最も高く、それぞれ22.3%、21.1%である。

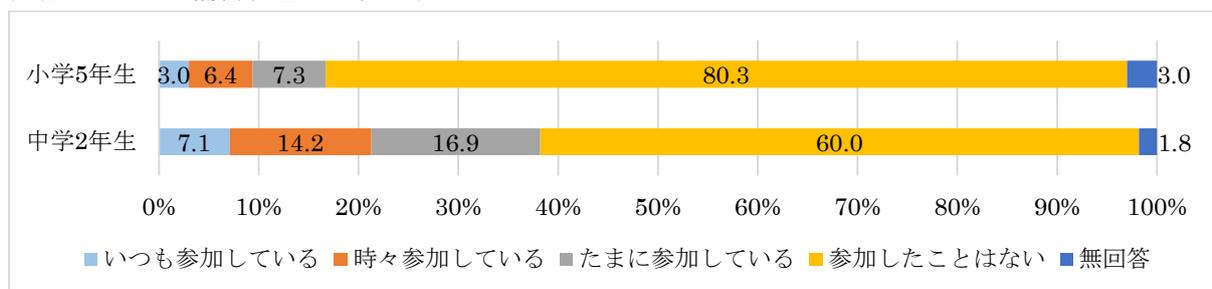
図表 5-2-21 学習塾や家庭教師の日数(中学2年生):生活困難度別(***)



(5) 学校の補習教室

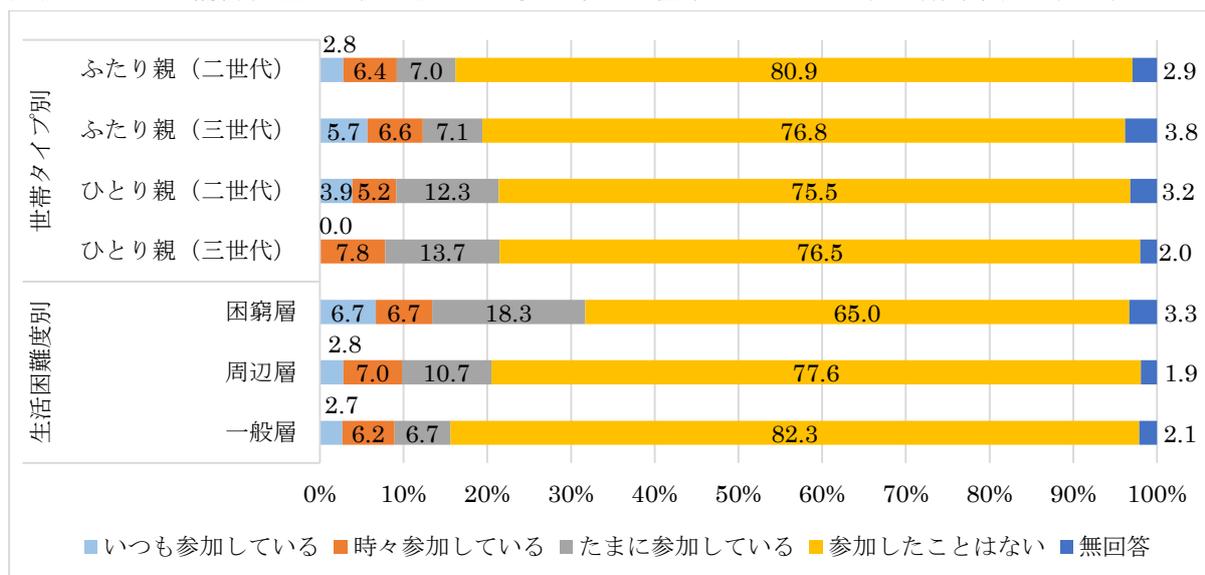
学校での補習教室への参加有無について、小学5年生は、3.0%が「いつも参加している」と回答し、80.3%が「参加したことはない」と回答している。中学2年生においては、7.1%が「いつも参加している」、60.0%が「参加したことはない」と回答していた。

図表 5-2-22 補習教室への参加状況



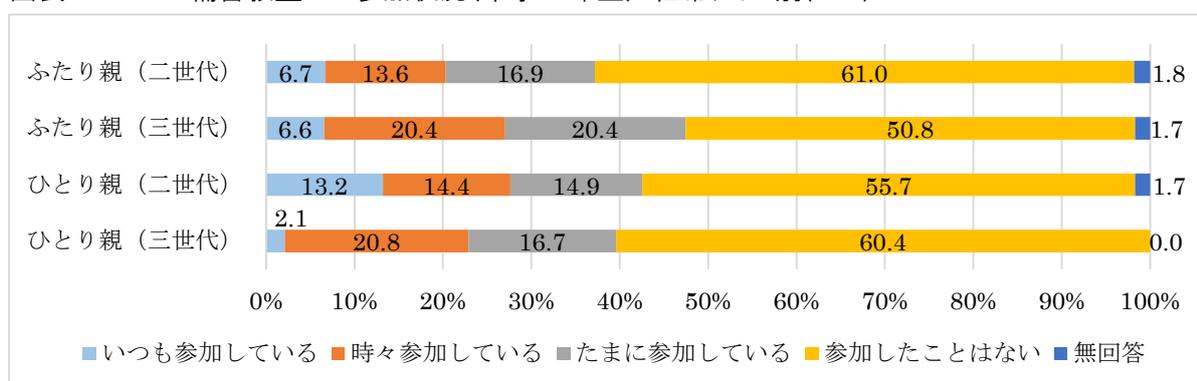
小学5年生においては、世帯タイプ別、生活困難度別ともに統計的に有意な差が見られる。補習教室に「時々参加している」と回答した割合がもっとも高いのは、ひとり親（三世代）世帯で7.8%である。生活困難度別で見ると、「たまに参加している」までを回答した合計を比較すると、一般層において15.6%、困窮層において31.7%とその差は約2倍である。

図表 5-2-23 補習教室への参加状況(小学5年生):世帯タイプ別(**)、生活困難度別(***)



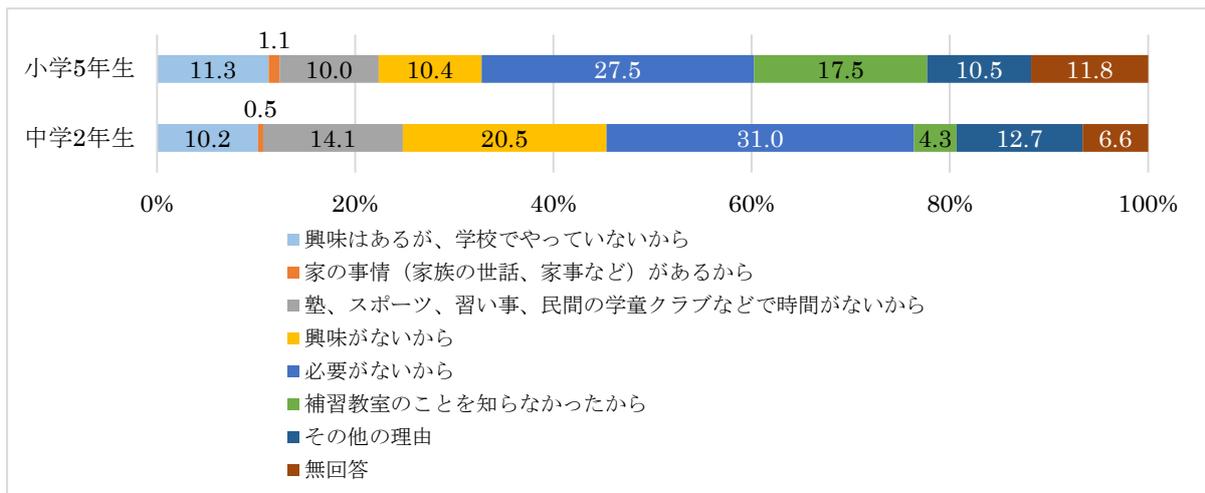
中学2年生については、世帯タイプ別でのみ統計的に有意な差が見られる。補習教室に「いつも参加している」と回答した割合がもっとも高いのは、ひとり親(二世帯)世帯で13.2%である一方、最も低いものはひとり親(三世帯)世帯で2.1%の結果が得られた。

図表 5-2-24 補習教室への参加状況(中学2年生):世帯タイプ別(***)



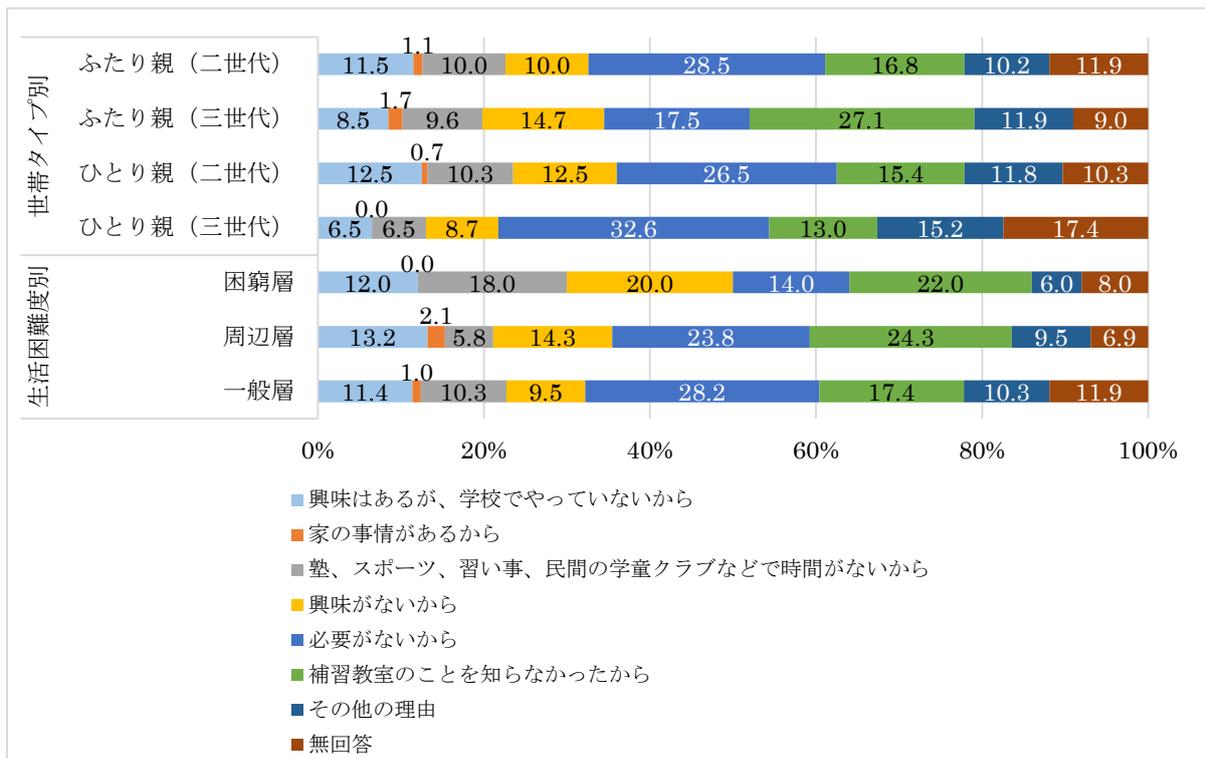
学校での補習教室に「たまに参加している」又は「参加したことはない」子どもに理由を聞いたところ、小学5年生、中学2年生ともに「必要がないから」がいちばん高く、小学5年生で27.5%、中学2年生で31.0%である。小学5年生においては「補習教室のことを知らなかったから」と回答する割合が次に高く17.5%である。一方の中学2年生は、4.3%が「補習教室のことを知らなかった」と回答している。中学2年生において「必要がないから」の次に割合が高かったのは、「興味がないから」で20.5%の回答が得られた。「家の事情(家族の世話、家事など)があるから」と回答する子どもは、小学5年生にて1.1%、中学2年生にて0.5%ではあるが存在する。

図表 5-2-25 補習教室にあまり参加しない理由



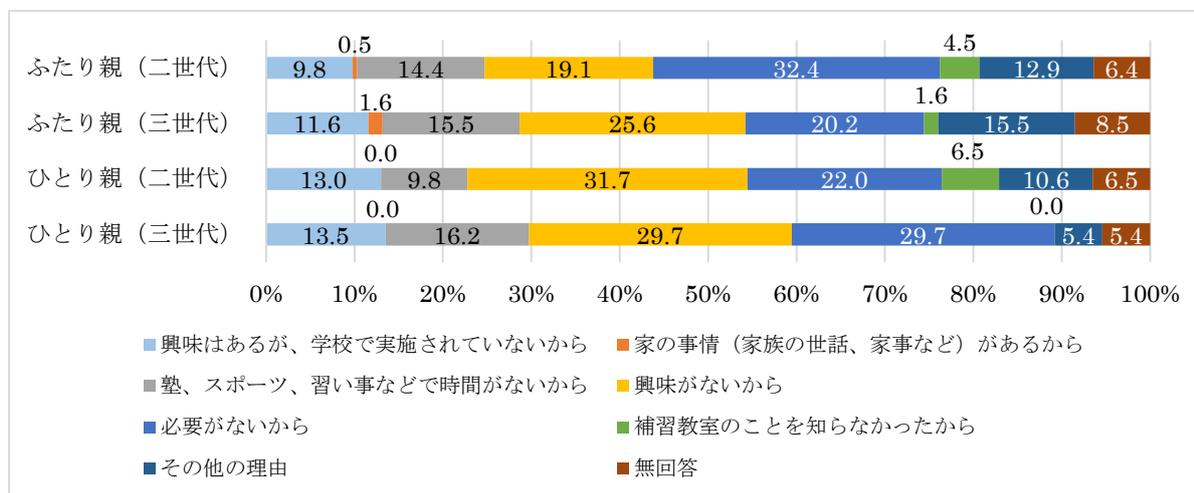
補習教室にあまり参加しない理由は、小学5年生においては世帯タイプ別、生活困難度別ともに統計的に有意な差が見られる。「補習教室のことを知らなかった」と回答した割合が低かったのはひとり親（三世代）世帯およびひとり親（二世代）世帯でそれぞれ13.0%、15.4%である。また、「必要がないから」と回答した割合が高いのはひとり親（三世代）世帯にて32.6%、ひとり親（二世代）世帯は26.5%である。生活困難度別で見ると、「補習教室のことを知らなかったから」と回答した割合が、もっとも低いのは一般層で17.4%、また「必要がないから」と回答する割合がもっとも高いものは、一般層の28.2%、最も低いものは困窮層の14.0%である。

図表 5-2-26 補習教室にあまり参加しない理由(小学5年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(***)



中学2年生においては、世帯タイプ別のみにて統計的に有意な差が見られる。「興味がないから」と回答する割合が最も高いのはひとり親（二世代）世帯で31.7%、次にひとり親（三世代）世帯（29.7%）と続く。また「補習教室のことを知らなかったから」と回答する割合が最も高いのは、ひとり親（二世代）世帯の6.5%である。

図表 5-2-27 補習教室にあまり参加しない理由(中学2年生):世帯タイプ別(***)



3. 学習支援事業

次に、学習支援事業の認知度と利用意向について見ていく。既存の無料学習支援制度については、「無料学習支援（せたゼミ、かるがもスタディールームなど）」について、「あなたは以下の場所を知っていますか。また使ったことがありますか。」との設問で子ども本人に聞いている。また、「あなたは、以下のような場所があれば使ってみたいと思いますか」との設問にて、「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」「大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてる場所」について聞いている。

ここでは、これまで通り世帯タイプ別および生活困難度別でのクロス集計を見るほかに、「授業の理解度別」についてもクロス集計を行う。「授業の理解度別」とは、先述の「学校の授業がわからないことがありますか」の質問の内、「いつもわかる」「だいたいわかる」を「わかる」、「あまりわからない」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」を「わからない」として定義している。

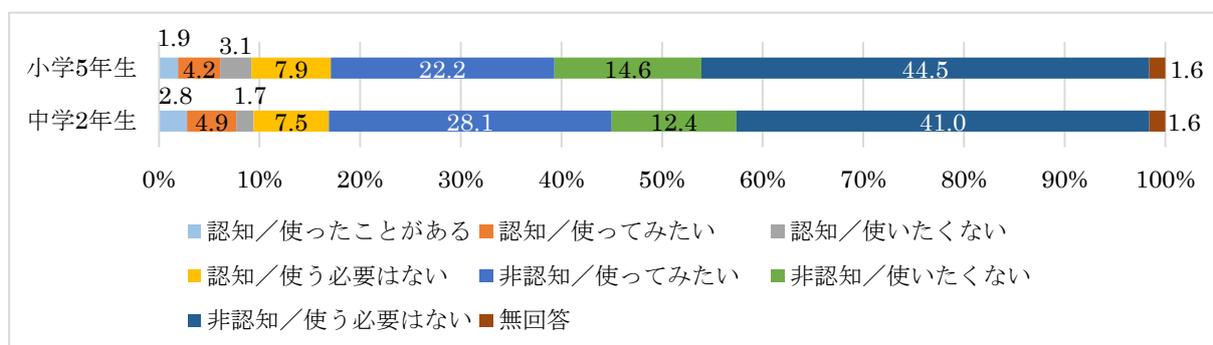
(1) 無料学習支援

小学5年生において、「無料学習支援（せたゼミ、かるがもスタディールームなど）※月謝のいらぬ勉強を教えてください」と、「知っている」（以下、「認知」）と回答した割合は17.1%、「知らない」（以下、「非認知」）と回答した割合は81.3%であった。また中学2年生においては16.9%が「知っている」、81.5%が「知らない」と回答している。

これら事業を実際に知っており、使ったことがある（「認知／使ったことがある」）は、小学5年生では1.9%、中学2年生では2.8%であった。

利用意向については、これら事業を知っており、かつ、使ってみたい（「認知／使ってみたい」）と回答したものは小学5年生で4.2%、中学2年生で4.9%であるが、これら事業を知らないが、使ってみたい（「非認知／使ってみたい」）と回答したものは小学5年生においては22.2%、中学2年生においては28.1%となっている。利用意向がある（「使ってみたい」）割合について合計すると、小学5年生では26.4%、中学2年生においては33.0%となった。

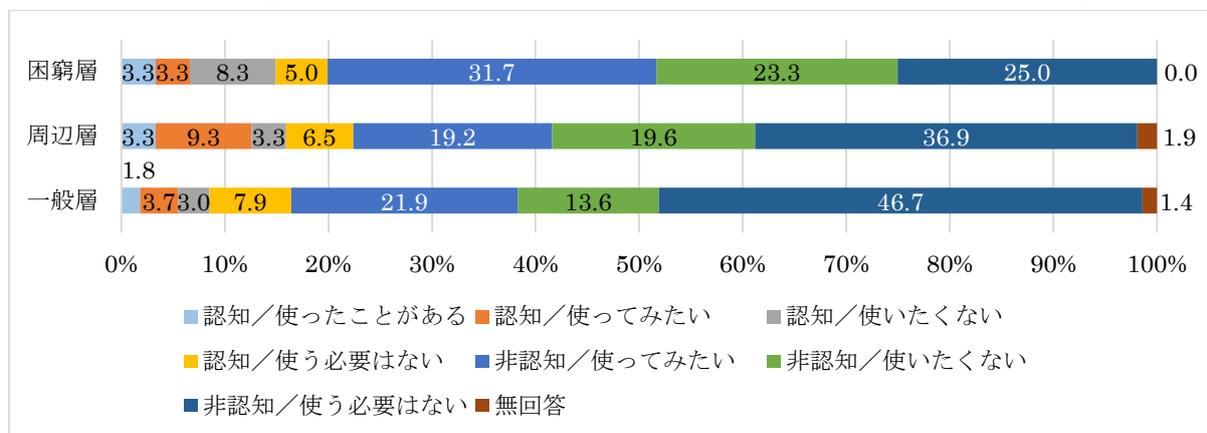
図表 5-3-1 無料学習支援(せたゼミ、かるがもスタディールームなど)



無料学習支援制度の認知度および利用意向について、小学5年生においては、生活困難度別および授業の理解度別で、統計的に有意な差が見られる。無料学習支援制度を「知っている」と回

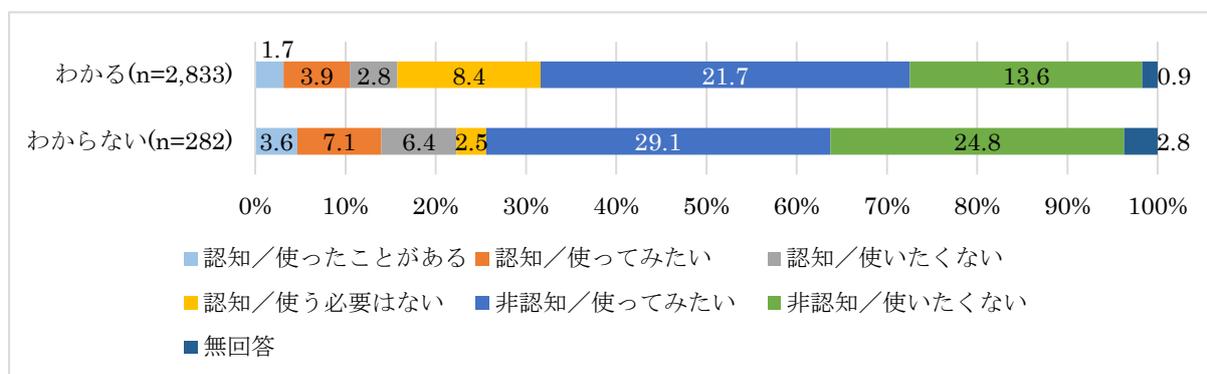
答した割合の合計が最も高いのは周辺層の合計 22.4%、もっとも低いのは一般層の合計 16.4%である。利用意向について、「非認知/使ってみたい」と回答した割合がもっとも高いのは困窮層であり 31.7%となっており、一般層の 21.9%と比較するとその差は 9.8 ポイントである。

図表 5-3-2 無料学習支援(せたゼミ、かるがもスタディルームなど)(小学 5 年生):生活困難度別(***)



授業の理解度別においては、「認知/使ったことがある」割合は、授業が「わからない」子どもで高く 3.6%である。「認知/使ってみたい」と回答した子どもは「わからない」子どもで高く、7.1%、また「非認知/使ってみたい」と回答する割合もまた授業が「わからない」子どもで高く、29.1%である。

図表 5-3-3 無料学習支援(せたゼミ、かるがもスタディルームなど)(小学 5 年生):授業の理解度別 (***)

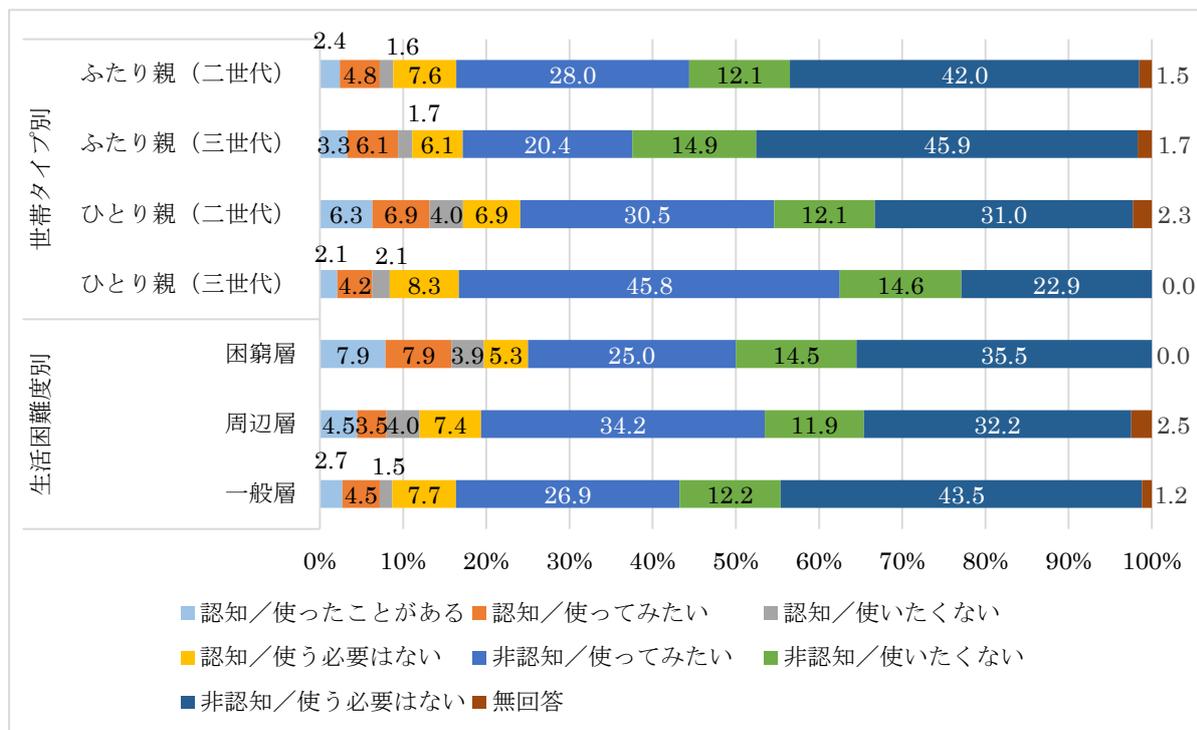


中学 2 年生においては世帯タイプ別、生活困難度別、授業の理解度別いずれも統計的に有意な差が見られる。「知っている」と回答した割合がもっとも高いのはひとり親(二世帯)世帯で 24.1%、もっとも低いのはふたり親(二世帯)世帯であり 16.4%である。一方の生活困難度別においては、「知っている」割合がもっとも高いのは困窮層で合計 25%、もっとも低いのは一般層の合計 16.7%である。

また、「非認知/使ってみたい」と回答した割合は世帯タイプ別で見ると、ひとり親(三世帯)世帯で最も高く 45.8%であり、最も低いふたり親(三世帯)世帯の 20.4%と比べると 2 倍以上と

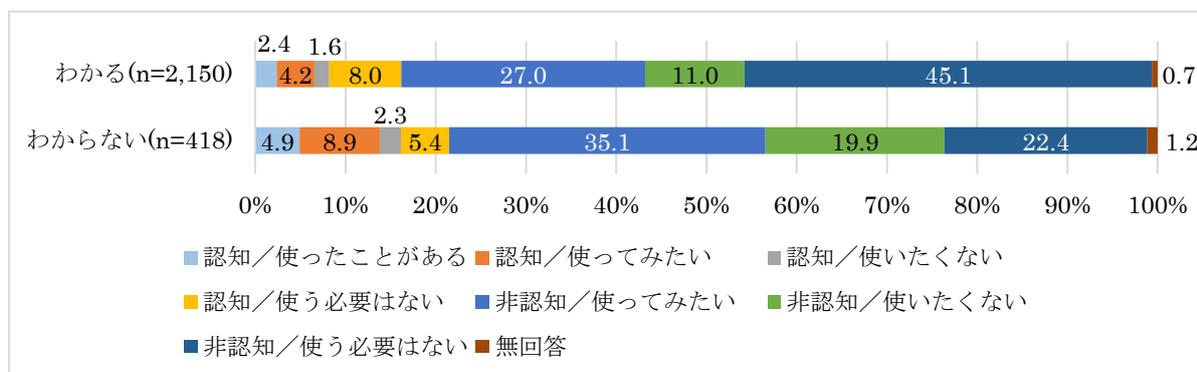
なっている。生活困難度別で見ると、「知っている（認知）／使ったことがある」と回答した割合で最も高いのは困窮層で7.9%と最も高いが、「認知／使ってみたい」「非認知／使ってみたい」と回答した割合は周辺層で最も高く、計37.7%となっている。

図表 5-3-4 無料学習支援(せたゼミ、かるがもスタディールームなど)(中学2年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



授業の理解度別で集計すると、授業が「わからない」とした子どもは、「認知／使ってみたい」が8.9%、また「非認知／使ってみたい」が35.1%となっており、授業が「わかる」子どもと比べて、利用意向がある子どもの割合が高い。

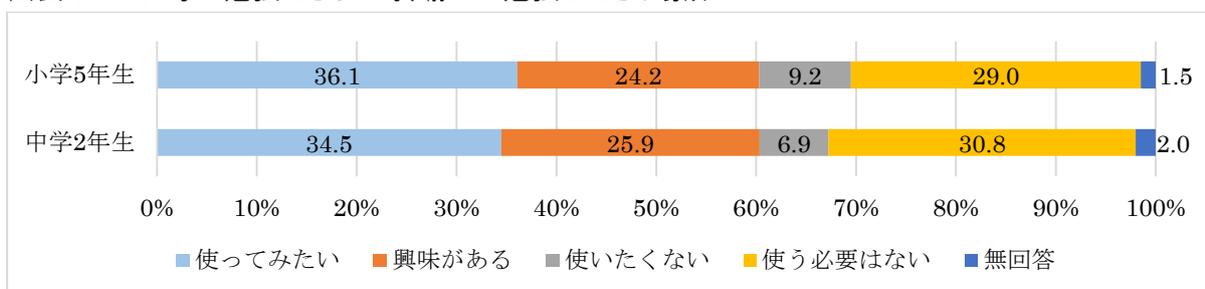
図表 5-3-5 無料学習支援(せたゼミ、かるがもスタディールームなど)(中学2年生):授業の理解度別(***)



(2) 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所

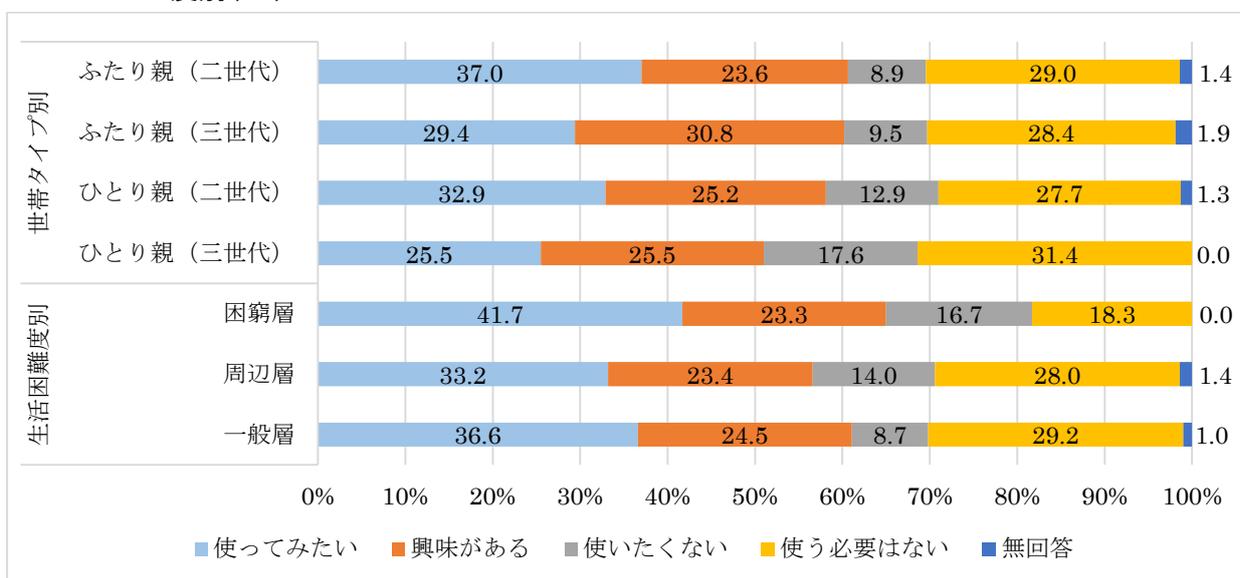
学習の妨げになる要因として、勉強する環境の欠如が考えられることから、子どもに「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」の利用意向を聞いた。その結果、小学5年生の36.1%、中学2年生の34.5%が「使ってみたい」と回答しており、また小学5年生の24.2%、中学2年生の25.9%が「興味がある」と回答している。

図表 5-3-6 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所



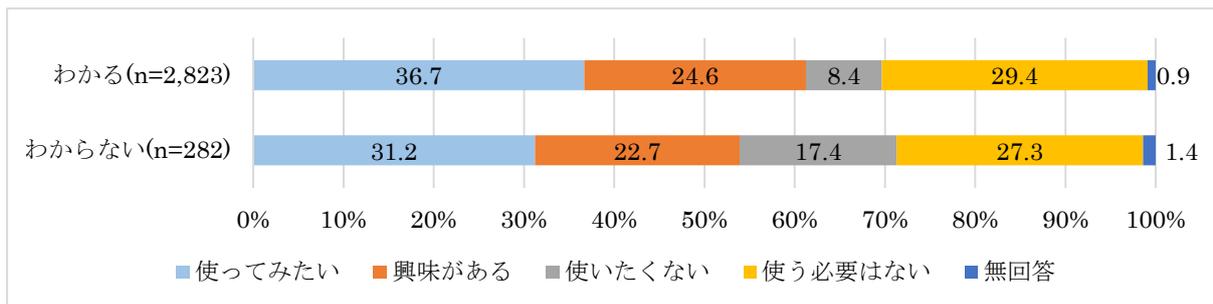
小学5年生においては、世帯タイプ別、生活困難別いずれも統計的に有意な差が見られる。世帯タイプ別で見ると、「使ってみたい」と回答する割合はふたり親(二世帯)世帯で最も高く37.0%である。生活困難度別で見ると、「使ってみたい」と回答する割合がもっとも高いのは困窮層であり41.7%を占める。

図表 5-3-7 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所(小学5年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(**)



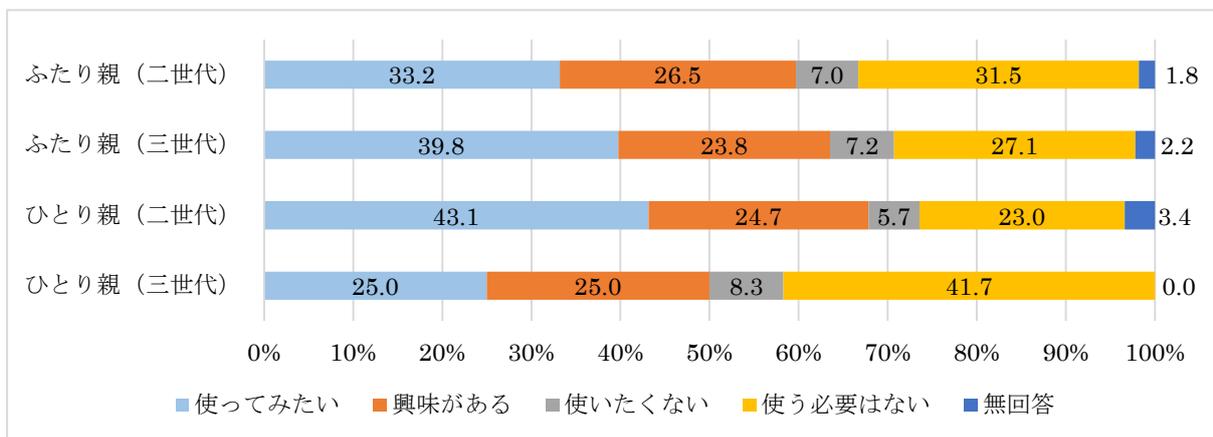
授業の理解度別で見ると、授業が「わかる」子どもの36.7%、「わからない」子どもの31.2%が「使ってみたい」と回答しており、授業が「わかる」子どもの方が「わからない」子どもよりも利用意向が高かった。

図表 5-3-8 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所(小学 5 年生):授業の理解度別(***)



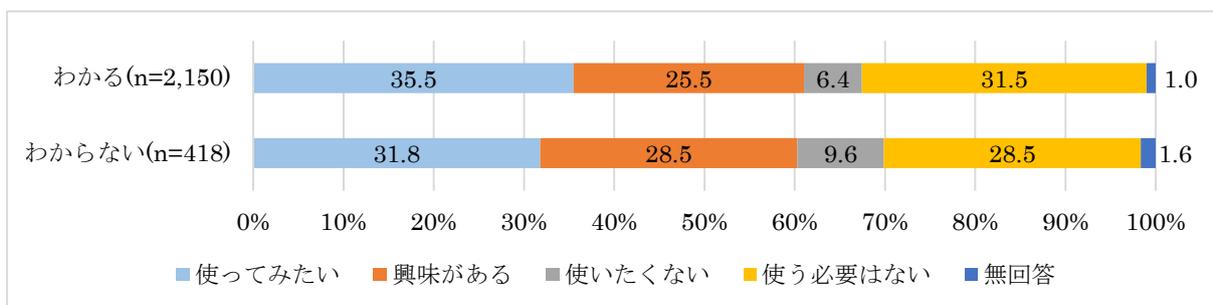
中学 2 年生においては、世帯タイプ別にて統計的に有意な差が見られる。「使ってみたい」と回答する割合はひとり親（二世帯）世帯で 43.1%と最も高い。「使ってみたい」「興味がある」を合計すると、ひとり親（二世帯）世帯では計 67.8%に利用意向がある。

図表 5-3-9 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所(中学 2 年生):世帯タイプ別(*)



授業の理解度別で集計した結果を見ると、授業が「わかる」子どもの 35.5%、授業が「わからない」子どもの 31.8%が「使ってみたい」と回答しており、授業が「わかる」子どもで利用意向がやや高かった。

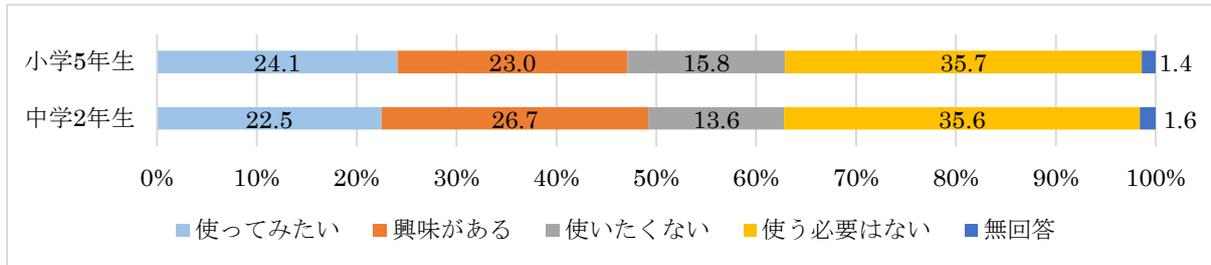
図表 5-3-10 家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所(中学 2 年生):授業の理解度別(**)



(3) 大学生による学習支援

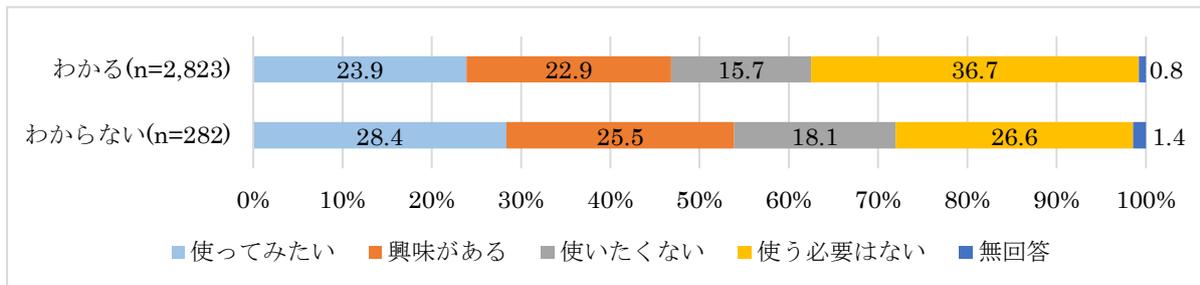
次に、「大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所」についての利用意向を子どもに聞いた。その結果、小学5年生の24.1%、中学2年生の22.5%が「使ってみたい」、また、小学5年生の23.0%、中学2年生の26.7%が「興味がある」と回答しており、合わせると約半数の子どもに利用意向があった。一方で、いずれの学年においても、世帯タイプ別、生活困難度別においては統計的に有意な差は見られなかった。

図表 5-3-11 大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所

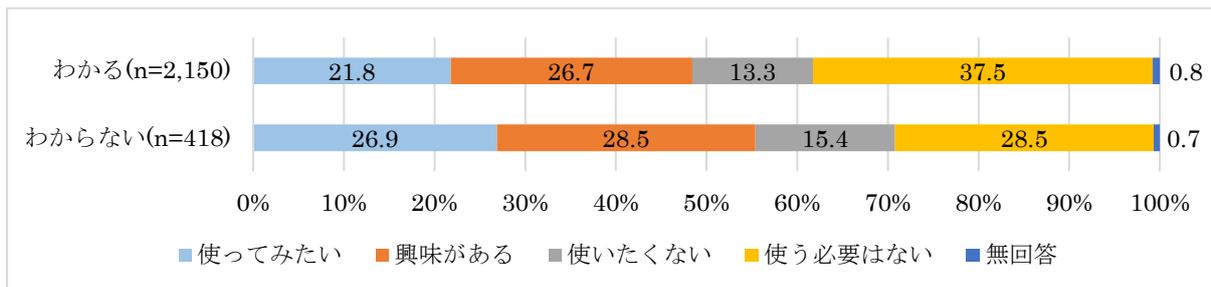


授業の理解度別で見ると、小学5年生においては、授業が「わかる」子どもの23.9%、「わからない」子どもの28.4%が「使ってみたい」と回答しており、「わからない」子どもの方が「わかる」子どもよりも利用意向がある子どもの割合が高い。中学2年生についても、同様に、「わからない」子どもの26.9%、「わかる」子どもの21.8%が「使ってみたい」と回答しており、授業が「わからない」子どもの方が利用意向がある子どもの割合が高い。

図表 5-3-12 大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所(小学5年生):授業の理解度別(**)



図表 5-3-13 大学生のお兄さんやお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所(中学2年生):授業の理解度別(***)



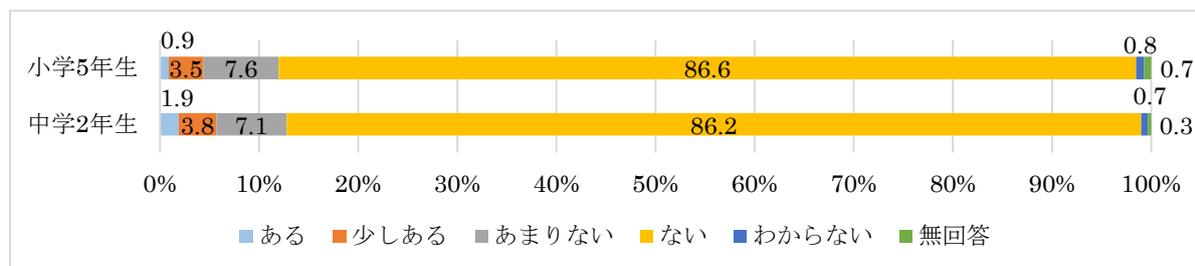
4. 不登校・いじめの経験

(1) 不登校傾向

ここでは、子どもの不登校の傾向を保護者と子どものそれぞれの回答から見る。

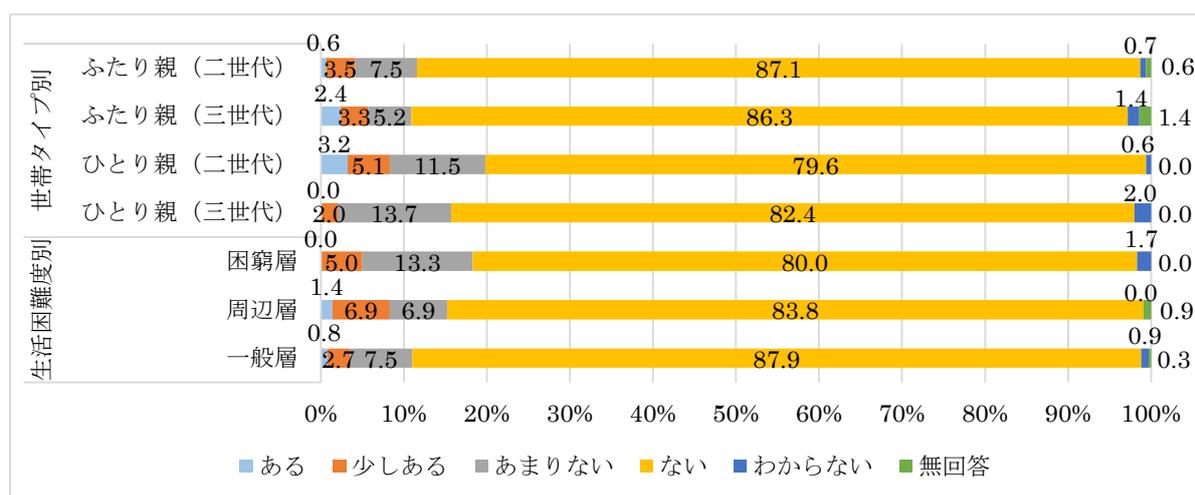
まず、保護者票の「お子さんは、不登校傾向があると思いますか」の設問から見ていくことにする。小学5年生にて、子どもに不登校傾向が「ある」「少しある」と回答した保護者の割合の合計は4.4%、中学2年生においては5.7%である。

図表 5-4-1 子どもの不登校傾向(保護者)



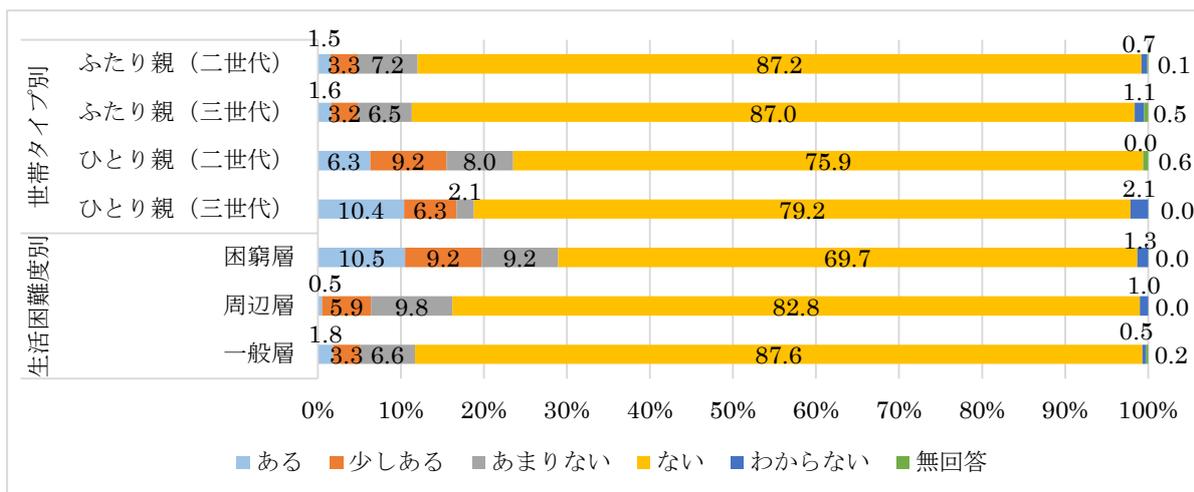
小学5年生においては世帯タイプ別、生活困難度別のいずれも統計的に有意な差が見られる。不登校傾向が「ある」「少しある」と回答した合計が最も高いのはひとり親（二世帯）世帯の合計8.3%、最も低いのはひとり親（三世帯）世帯の合計2.0%である。生活困難度別においては、周辺層で最も高く合計8.3%の保護者が子どもに不登校傾向があると答えている。

図表 5-4-2 子どもの不登校傾向(保護者)(小学5年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(**)



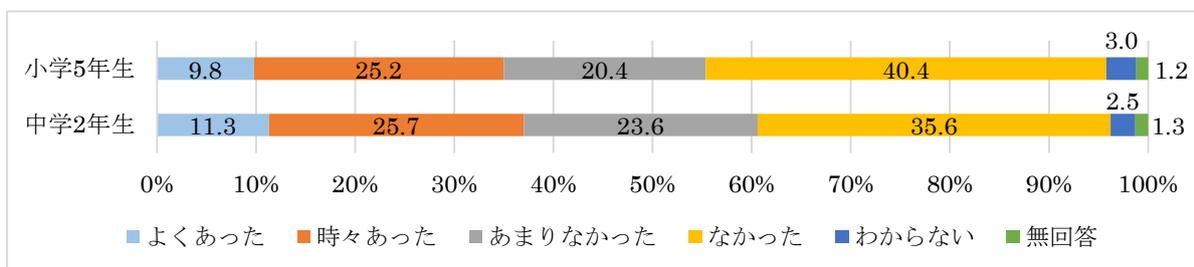
中学2年生にても同様に、世帯タイプ別、生活困難度別のいずれも統計的に有意な差が見られる。不登校傾向が「ある」「少しある」と回答した割合が最も高いのは、ひとり親（三世帯）世帯で計16.7%であり、これはふたり親（二世帯）世帯ふたり親（三世帯）世帯（いずれも計4.8%）の3倍以上である。また、生活困難度別においては、困窮層で高く計19.7%、もっとも低いのは一般層の計5.1%である。

図表 5-4-3 子どもの不登校傾向(保護者)(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(***)



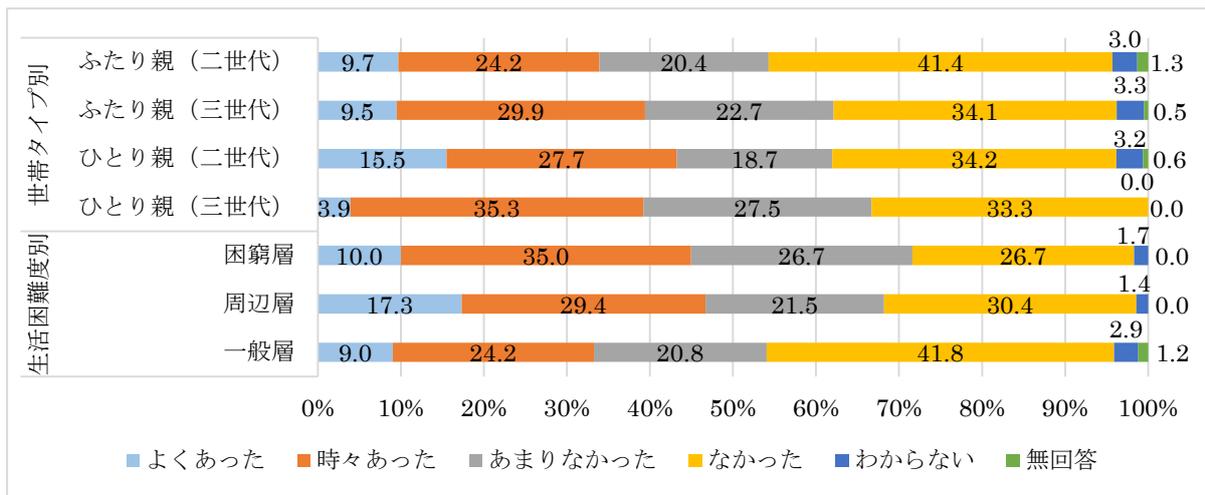
次に、子ども自身の回答から不登校傾向を見ていくこととする。本調査では、子ども票にて「(あなたは、これまでに) 学校に行きたくないと思った (ことがありましたか)」の設問を、「よくあった」「時々あった」「あまりなかった」「なかった」「わからない」の 5 つの選択肢を設けて聞いている。その結果、「学校に行きたくないと思った」ことが「よくあった」と回答した子どもの割合は小学 5 年生では 9.8%、中学 2 年生では 11.3%と、保護者から見た不登校傾向と比較して、高い割合の子どもが該当する。

図表 5-4-4 学校に行きたくないと思った(子ども)



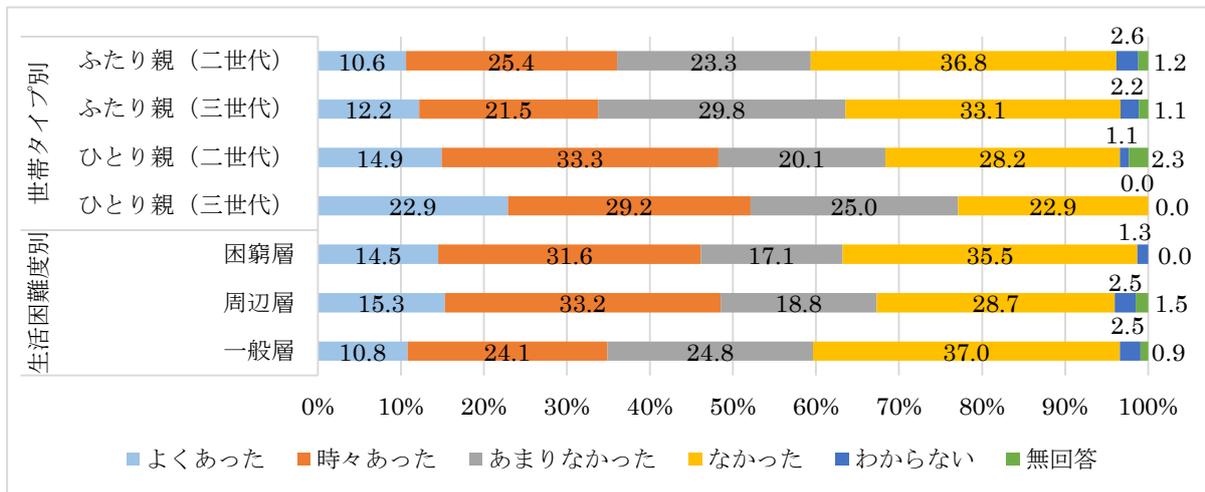
小学 5 年生においては、世帯タイプ別、生活困難度別のいずれも統計的に有意な差が見られる。「学校に行きたくないと思った」経験が「よくあった」と回答する子どもの割合は、ひとり親 (二世帯) 世帯でもっとも高く 15.5%、もっとも低いのはひとり親 (三世帯) 世帯で 3.9%の結果である。生活困難度別においては、周辺層で最も高く 17.3%となっており、一般層と比較して 8.3 ポイントの差が見られる。

図表 5-4-5 学校に行きたくないと思った(子ども)(小学 5 年生):世帯タイプ別(*)、生活困難度別(***)



中学 2 年生も同様に、生活困難度別、世帯タイプ別いずれも統計的に有意な差が見られる。「学校に行きたくないと思った」経験が「よくあった」と回答する子どもの割合がもっとも高いのはひとり親 (三世帯) 世帯 22.9%、もっとも低いのはふたり親 (二世帯) 世帯の 10.6%でその差は 2 倍以上である。生活困難度別においては、周辺層で最も高く 15.3%、また困難層も 14.5%が「よくあった」と回答しており、一般層と比較して 3.7 ポイントの差が見られる。

図表 5-4-6 学校に行きたくないと思った(子ども)(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(**)

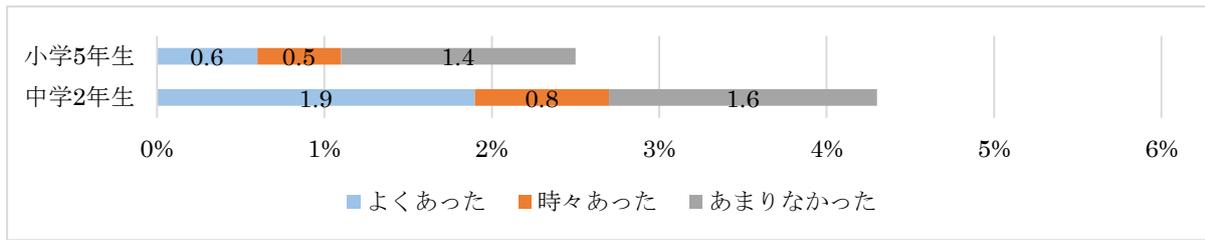


(2) 不登校経験

最後に、子ども自身の回答による「(あなたは、これまでに) 一か月以上学校を休んだ (病気の時をのぞく) (ことができましたか)」の設問の回答を見ていくことにする。

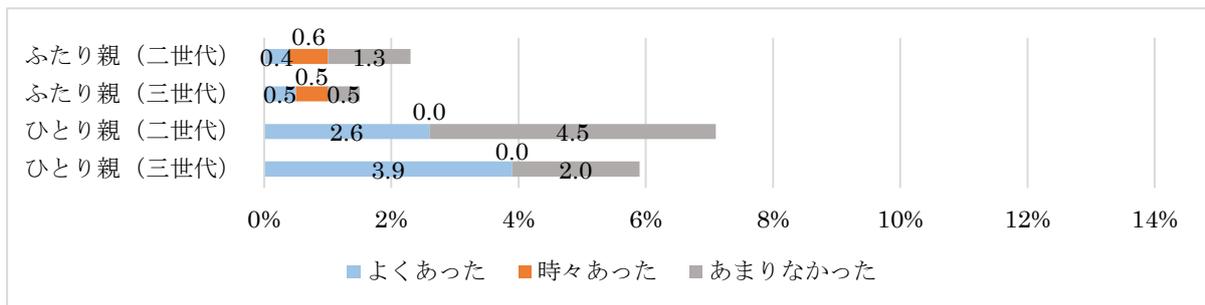
「一か月以上学校を休んだ (病気の時をのぞく)」経験が「よくあった」「時々あった」と回答した子どもの割合は、小学 5 年生では計 1.1%、中学 2 年生においては計 2.7%である。

図表 5-4-7 一か月以上学校を休んだ(病気の時をのぞく)



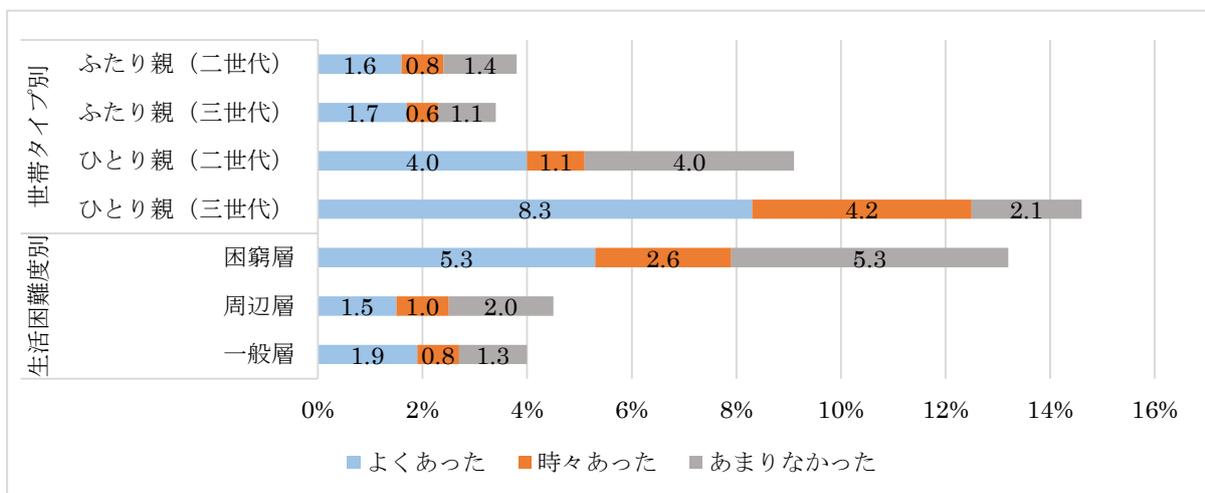
小学5年生においては、世帯タイプ別でのみ、有意な差が見られる。「よくあった」と回答する割合は、ひとり親(三世帯)世帯で最も高く3.9%であった。

図表 5-4-8 一か月以上学校を休んだ(病気の時をのぞく)(小学5年生):世帯タイプ別(***)



中学2年生においては、世帯タイプ別、生活困難度別のいずれも有意な差が見られた。「よくあった」と回答した子どもの割合は、ひとり親(三世帯)世帯で最も高く8.3%だった。また、生活困難度別においては困窮層で最も高く5.3%だった。なお、東京都調査では同学年のひとり親(三世帯)世帯では「よくあった」2.8%、「時々あった」1.5%、困窮層では「よくあった」3.6%、「時々あった」1.3%であり、世田谷区の割合が高いことがわかる。

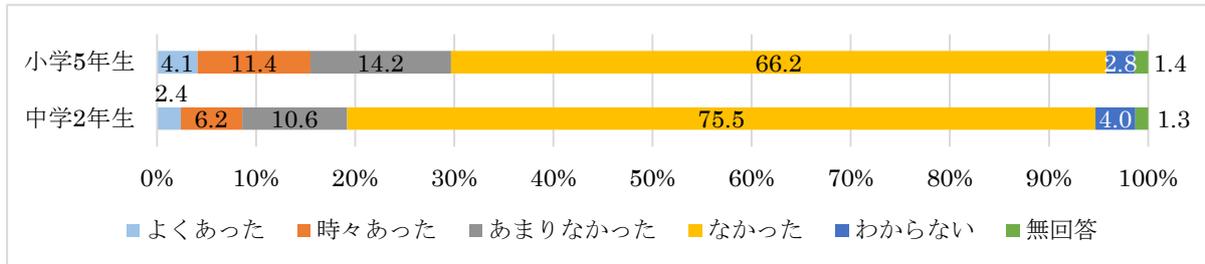
図表 5-4-9 一か月以上学校を休んだ(病気の時をのぞく)(中学2年生):世帯タイプ別(***)、生活困難度別(**)



(3) いじめられた経験

次に、子ども本人の回答から、「いじめ」の経験を見ていく。「(あなたは、これまでに) いじめられた (ことがありましたか)」の設問に、「よくあった」「時々あった」と回答した子どもの割合は、小学5年生で合計15.5%、中学2年生で8.6%である。

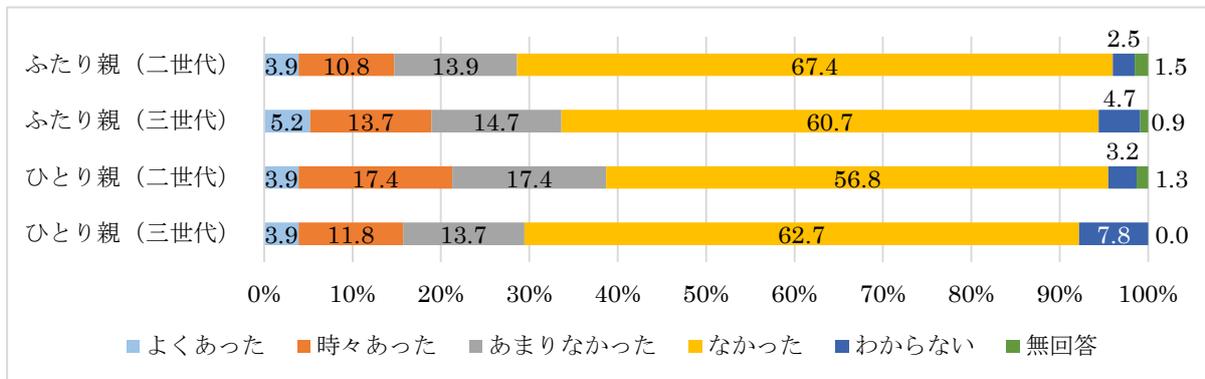
図表 5-4-10 いじめられた経験



小学5年生においては世帯タイプ別にのみ統計的に有意な差が見られる。「いじめられた」経験が「よくあった」「時々あった」と回答した子どもの割合はひとり親(二世帯)世帯で最も高く計21.3%、また「なかった」と回答する割合が最も高かったのはふたり親(二世帯)世帯で67.4%である。

一方の中学2年生においては世帯タイプ別、生活困難度別いずれも統計的に有意な差が見られなかった。

図表 5-4-11 いじめられた経験(小学5年生):世帯タイプ別(*)



5. まとめ

(1) 学力と学習資源

まず、主観的成績（子ども自身による成績評価）は、中学2年生は小学5年生に比べて低い傾向があり（図表 5-1-1）、特に、ひとり親（三世帯）世帯にて主観的成績が低い（図表 5-1-2、図表 5-1-3）。また、生活困難度別で見ると、いずれの学年においても、生活困難度が上がるほど「下の方」と回答する割合が高くなる傾向にあった（図表 5-1-2、図表 5-1-3）。

同様の傾向が、子ども自身による「あなたは授業がわかりますか」の回答にも表れている。授業が「わからない」（「あまりわからない」、「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」）子どもは、小学5年生の段階においても1割近く存在し、中学2年生においては16.5%にのぼる（図表 5-1-4）。ここでも、ひとり親世帯の子どもがわからない傾向が確認されるが（図表 5-1-5、図表 5-1-6）、生活困難度別の差はさらに大きい。小学5年生の困窮層にて「いつもわかる」と回答する子どもは一般層より24.3ポイントも低く、また、困窮層の約2割は、学校の授業が「わからない」と答えている。中学2年生の困窮層の3割以上は学校の授業が「わからない」と答えている（図表 5-1-5、図表 5-1-6）。

また、授業が「わからない」子どもの多くが、小学低学年にて既に授業がわからなくなっている。小学5年生においては、「小学3年生のころ」「小学4年生のころ」にわからなくなっている子どもが最も多かったが、小学1年生の時点ですでにわからなくなっている子どもが1割以上存在した。中学2年生においては、「中学1年生のころ」が最も多い（図表 5-1-7）。

授業の理解度の格差の一つの要因として考えられるのが、子どもの持つ学習資源の格差である。勉強がわからない時に教えてくれる人は、小学5年生については「親」が最も多く、次に「学校の先生」、中学2年生は「友だち」が最も多く、次に「親」となる（図表 5-2-1、図表 5-2-2）。全体として、ひとり親世帯の場合の「親」や、生活困難度別の「塾や習い事、民間の学童クラブの先生」といった学習資源の有無が異なることが確認された。また、中学2年生において、「学校の先生」に教えてもらおうと回答した割合は、生活困難度別では困窮層にて最も低い（図表 5-2-6）。

自宅における物理的な学習環境については、概ね良好であるものの、一部の子どもにてその欠如が見られる。「自宅で宿題をすることができる場所」については、小学5年生、中学2年生いずれも9割以上が「ある」ものの、約3%の子どもには「ない」（図表 5-2-10）。また、「自分専用の勉強机」については、小学5年生の23.2%、中学2年生の11.0%が持っていない（図表 5-2-11）。困窮層およびひとり親世帯において、「自宅で宿題をすることができる場所」「自分専用の勉強机」を子どもたちは「ほしい」と思っているが、「ない」状況が見られる（図表 5-2-12~図表 5-2-15）。

通塾（又は家庭教師による指導の受講）している子どもの割合は全体的に高く、小学5年生では66.4%、中学2年生では64.1%にのぼる（図表 5-2-16）。このうち週4日以上通塾している割合は、小学5年生では10.1%と1割を超える（中学2年生では5.1%）（図表 5-2-19）。通塾率と通塾日数は生活困難度の影響を大きく受けている（図表 5-2-17、図表 5-2-18、図表 5-2-20、図表 5-2-21）。

(2) 学習支援事業の利用意向

それでは、勉強がわからない時、子どもたちはどのような学習資源を利用しているのだろうか。

まず、最も身近である学校で行っている補習教室については、「いつも参加している」「時々参加している」「たまに参加している」を合わせると小学5年生の16.7%、中学2年生の38.2%が参加している（図表5-2-22）。学校からの働きかけがあるためか、小学5年生では主観的成績や授業の理解度が相対的に低い傾向のあった困窮層やひとり親世帯の子どもがより参加していた（中学2年生ではこのような傾向は見られなかった）（図表5-2-23、図表5-2-24）。さらに、参加していない子どもの一部は「興味があるが、学校で実施されていないから」と答えており、潜在的なニーズはまだ存在すると考えられる（図表5-2-25）。

学校外の「せたゼミ」「かるがもスタディルーム」などの既存の無料学習支援は、全体的に利用率は低く、その存在を知らない子どもが約8割である（図表5-3-1）。これらの利用意向を持つ割合は、自己評価にて授業が「わからない」と答えている子どもにおいて相対的に高い（図表5-3-3、図表5-3-5）。

また、「大学生のお兄さんお姉さんが、勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向は、「使ってみたい」が約4人に1人、「興味がある」を合わせると半数近い子どもが両学年ともに存在する（図表5-3-11）。既存の無料学習支援と同様に授業が「わからない」と答えている子どもの方が相対的に利用意向のある子どもの割合が高い（図表5-3-12、図表5-3-13）。

これらを鑑みると、世田谷区においては「教えてくれる人」を伴う学校外の無料学習支援事業のニーズは、特に、学力の自己評価が低い子どもたちにおいて高いと考えられる。しかし、既存の事業は認知度が低く、また、地理的な要素も考えると、より多くの無料学習支援事業を展開し、それらへニーズがある子どもたちをつなぐ仕組みの検討が必要であろう。

一方で、「静かに勉強ができる場所」についても、高いニーズが確認される（図表5-3-6）。これについては、授業が「わかる」子どもの方が「わからない」子どもより利用意向をもっている割合が高いものの、「わからない」子ども、困窮層、ひとり親世帯の子どもも含めて幅広い層の子どもたちに利用意向があり（図表5-3-7~図表5-3-10）、より拡充する必要性が示唆される。

（3）不登校・いじめの経験

実際に、不登校を経験したと認識している子どもは全体では小学5年生は1.1%、中学2年生は2.7%（「1か月以上学校を休んだ（病気の時を除く）」が「よくあった」「時々あった」）である（図表5-4-7）。ただし、中学2年生のひとり親世帯と困窮層においては、その割合は突出して高くなる（ひとり親（二世帯）世帯5.1%、ひとり親（三世帯）世帯12.5%、困窮層7.9%）（図表5-4-9）。この割合は、東京都調査と比較しても高く、さらなる詳しい調査が必要であろう。

また、両学年ともに約1割の子どもは「学校に行きたくないと思った」ことが「よくあった」と答えており（図表5-4-4）、不登校の恐れのある子どもは少ない。この割合は、保護者の認識の2倍以上である。この「不登校傾向」のある子どもは、困窮層に比べても、周辺層の子どもにおいて特に割合が高くなっており、周辺層の子どもが何らかの要因を多く抱えていることが考えられる（図表5-4-5、図表5-4-6）。

また、いじめについては、「いじめられた」ことが「よくあった」「時々あった」と答えた子どもの割合は、小学5年生では計15.5%、中学2年生では計8.6%である（図表5-4-10）。いじめの経験は、両学年において生活困難度に関連しておらず、これは東京都調査とは異なる点である。

いじめについては、家庭の経済状況に関わらず、全ての子どもについて同様に配慮する必要があると言える。